

Pensoj 16, P32 上 0.9.

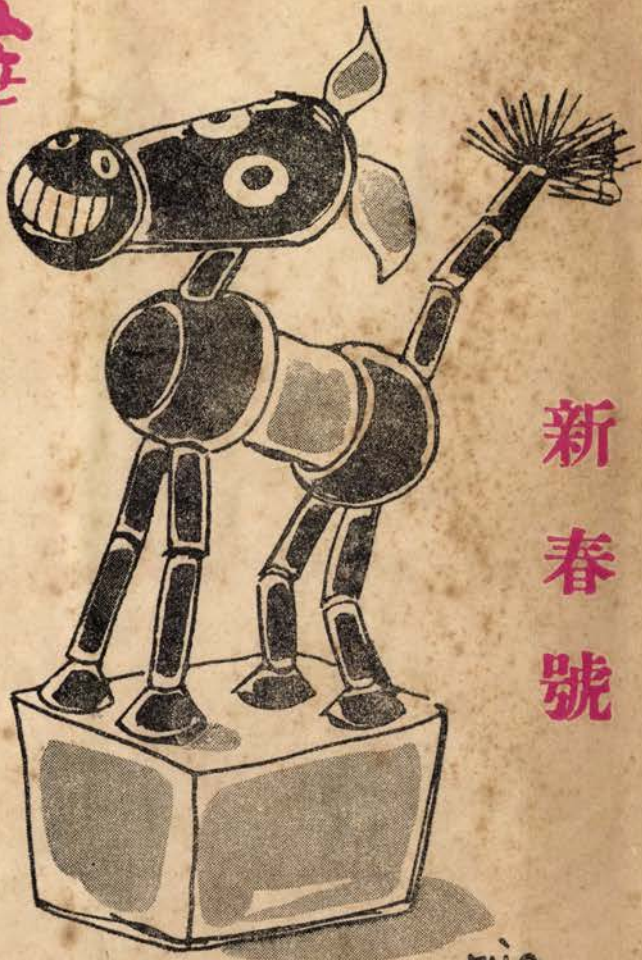
川柳の雅証

麻生路郎☆主筆

Pensoj flugas trans la land-linon

The Senryu Zasshi

No.320



新春號



昭和廿九年 七月一日第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行) 創刊大正十三年・通卷三百二十号

# 新春号目次

題 表 紙 字 麻生 路郎  
米田三男之助

競馬を語る 没食子 貴山・文 (四)  
川柳人 蝶・清瀬・一瓢 (一)  
言葉のさわり 川村 花菱 (二)  
寸 言 小山 文三 (三)  
川柳大学 (Ⅶ) 福田山雨 (二)  
川柳と云う流儀 丸尾 潮花 (三)  
人間横丁 (Ⅷ) 東野 大八 (一)  
パチンコ漫談 須崎 豆秋 (二)  
馬・馬・馬・馬・馬 諸 家 (二四)  
に就いて訊く 八木摩太郎 (一七)  
街路樹と川柳 富士野鞍馬 (二六)  
柳樹から馬を 曳き出す (二七)  
飛燕往来 (二七)

★

不朽洞句稿 麻生 路郎 (三)  
近作柳稿 麻生路郎選 (一八)  
川柳塔 麻生路郎選 (一八)  
同舟近詠 諸 家 (一九)  
「思」出 正本水客選 (二二)  
一路集 「バスガール」 富岡渡舟選 (二二)  
各地柳壇 (二四)  
柳界展望 (二五)  
不朽洞会から (二六)  
編輯局にて (二六)

## 初詣

幸運カード付乗車券発売  
1日から3日まで

賞品 スクーター・ミシン・カメラ  
ほか多数

抽せん 1月4日住吉大社境内  
本殿國宝指定(28.11月)

### 住吉大社 水間観音

全線に亘り電車・バス大増発



### 方違神社

### もつ八幡

### 南海電車

## 本社新春句会

時 11月9日(第二土)午後六時  
處 11大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前  
(市電下寺町・日本橋三電停下車)  
於 光明寺  
題 1「酒」・「初風呂」・「花嫁」

柳 話  
句 評

麻生 路郎  
水谷 鮎美  
出席者 全員

★川柳紅白試合  
★当日廿八年度不朽洞杯、把持者及一ヶ年間  
本社句会全出席者を表彰する  
★プロの詳細は省略します

川柳雜誌社句会部

OSK

毛織物  
既製服  
製造卸商

株式会社  
大坂商店

大阪市東区糸屋町一丁目二  
電話東 一七四五番

大阪名産  
湯氏いりや

百貨店著名菓子店にあります  
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九  
民 かまど本舗  
電話 三四〇九

# 川 雜 新 春 号

昭和廿九年一月



氏三の年福本藤・路生麻・茶本藤 向て右より 東京・黒目の年満居に

## 不朽洞句稿

麻 生 路 郎

ストをした顔もしないで年賀に來

数の子で暮から女侍べらせる

幸福は春早々を旅仕度

呑みに行く伊勢とも云えず初詣

人が來たから床を出る松の内

本の山それもうれしい寝正月

読む筈が呑んで暮らした三ケ日

チンジャラジャラチンジャラジャラと春の音

パチンコの老舗を賣つてまだ儲け

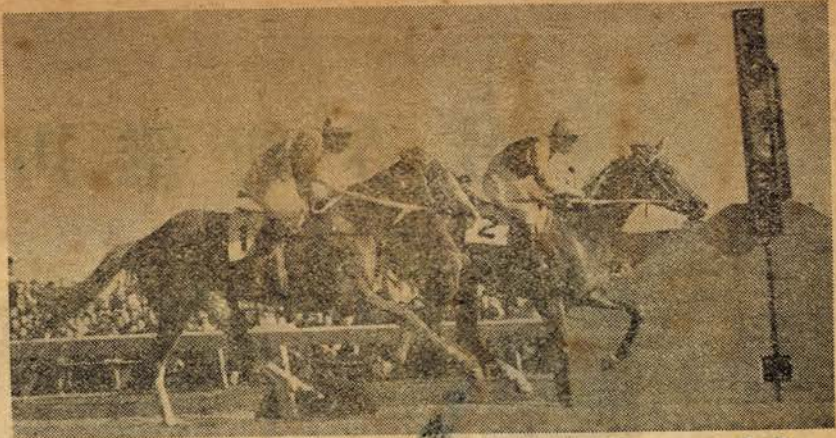
十年の空白へ妻化粧する

鴨一羽撃てぬ腕前社を休み

未亡人が寄附するとこヘシャッター切り

漏電と云えば落度でない如く

独立でやつぱり左歩きたし



日本ダービーゴール寸前

## 競馬を語る川柳人

市友眞 場淵鍋 没貴一 食山瓢 子山下 土井山 井清梨 文潮 蝶里

(会司) 麻生梨里

没食子Ⅱ國營はどの位あるのですか。

清潮Ⅱ國營は全國に十二ヶ所です。それに公認の競馬場・所謂草競馬ですね、これが各府縣に一ヶ所ないし二ヶ所で、京阪神には多いです。金の遊んでいる處や都會などにね。

梨里Ⅱ草競馬と云うのは？

一瓢Ⅱつまり角力で云えば本場所があつて、地方に行けば草角力があるように、草角力の意味でしょう。

清潮Ⅱ草津の競馬はかなわん汽車で行くんですがね、帰りには満員でデツキにつかまつて帰つて來ると煤煙だらけでね。負けた上に眞黒になつて(笑聲)

梨里Ⅱ清潮さんは大麥ファンだそうですが、どう云う点が面白いんですか。

清潮Ⅱやはりスリルですかな。自分の買った馬ばかりを見ているんですが、手の中にじつと汗を握つていますな。それに競輪と違つて、馬の走るのを観るだけでも値打ちがあるし、一日に千円か千三百円位で遊べて都合によれば儲かる。トン／＼で行けたら上等ですな。ことに淀などは家中に連れだつてピクニックに

行くつもりで出掛けてもいゝし映画の比じゃないね。

文蝶Ⅱ勝負は度外視してですな。

清潮Ⅱ勿論、勝負はどちらでもいゝ。

一瓢Ⅱいや、度外視すると云うけど、そうはゆきませんな。清潮Ⅱ度外視しているのだけれども、そのうちに病みつきになつて來る。

一瓢Ⅱ僕はあんたに初めて連れて行つてもろて、その日に飲んで喰つて五百五十円残るだけ儲けたので一べんに病みついてしもうた。

清潮Ⅱ初めて連れて行つて負けたら困ると思うてあの時はほんまに力が入つたがな。角力見に行くとな、土俵で負けそうになると倒されまいと思つてこちらが力をいれて踏ん張るので肩がこる(笑聲)婦

つたらあんまさんが要る(笑)まだ競馬の方は時間が短いだけいゝけれども。

没食子Ⅱ清潮さんがピクニックによいと云われたけれど、それは淀の競馬場は三十円の入場料を拂つてもそれだけの値打ちはありますね。なかなか立派な競馬場ですよ。清潮Ⅱ競馬場と云うより公園だね。

没食子Ⅱ馬券を買わずに入場する人が沢山あります。そら美しいもんですよ。處で清潮さん、單式と複式と重勝式とありますが、重勝式と云うのはどんなのですか。

清潮Ⅱ重勝式と云うのはね、一レースと二レースと三レースの一着馬を当てるのです。一レースの時に沢山券を買つて置かないと折角一レースで勝つても二レース三レースの券は金で買えないのです。その勝つた券と引換えになるのですよ。だから最少限度此の馬ならと思う馬が三頭あるとすれば三頭について三枚以上宛は買わなければならぬのです。

没食子Ⅱつまり券を沢山買つす方法ですな。その変り当つたら大きいでしょう。

清潮Ⅱそうですね。然しこの頃は重勝式でも大した事はありません。一等館なんかへ行くと、處の奥さんがハンドバツク開けて小切手を出して銀行で千円札を何枚も貰つて馬券を買つたりしているのを見とネー。

文蝶Ⅱ豪華メンバーですな。

清潮Ⅱ實際に貧乏人の來る處やないと思いますな。

梨里Ⅱ一等館と云うと？

梨里Ⅱ今日はどうこそ、貴山さんがまだお見えにならない様ですがそろ／＼始めて頂きましよ。戦後大麥競馬、競輪が盛んですが、その是非については度々世論的になる様です。然し政府としても收

入にもなり、またファンにとつては相当魅力のあるものらしく、仲々止めになる形勢もないようです。競馬の面白味や弊害、その他に就いて川柳家としてどう観るか、雜談的にお話し願います。

清潮Ⅱ一等館と二等館とあるのですよ。一等館は決勝線の近くで入場料五十円です。二等館は三十円です。ちやんと銀行も郵便局も出張して来ているのですよ。だから現金を持つて行かなくても其處で出せるのです。その点私は持つているお金をスツてしまつたら帰りの自動車代もなくなつてしまうので、淀から山崎までしよつ中歩かされてますねん。

文蝶Ⅱ家まで乗つて帰つて拂つたらいい。

清潮Ⅱいや、そんな自動車で違ふ。バスですもん。電車の方は往復買つて来るからいい、が山崎まではバスだからね。文蝶Ⅱそれだけ歩いたらようお腹すくやろう。

清潮Ⅱ負けるし、お腹はすくし。

文蝶Ⅱそれで家へ帰つて御飯を沢山喰べられたら細君おこるのんあたりまえや(笑聲)清潮Ⅱそやから行くまでに金の隠しようと思つたらね。何處へ隠そうかと思つて(笑聲)文蝶Ⅱ誰の句だつたか大分昔の句だが、

内緒金女房がぬがす服で

鳴り

と云う處ですな。

梨里Ⅱ馬券は幾らするのです。清潮Ⅱ百円券と千円券とあります。(この時貴山氏出席)

梨里Ⅱその千円券と云うのは百円券十枚と云う意味ですか。清潮Ⅱそうです。終戦後一番安かつたときは一枚十円と云う時がありました。戦前は二十円券だつた。それを一人一枚しか買えないのです。

梨里Ⅱ戦前に二十円と云えば貧乏人は行けませんね。

貴山Ⅱ昔は足一本買つと云つて五円ずつ出して一枚買つたりするのがありました。当るのも最高が二百円です。後は

当らなかつた人に特配と云つて拂戻しをしたものです。僕は二百円当て、阪神の鳴尾から自動車で乗つて帰つたことがある。昔の二百円と云えばえらい勢でしたからね。

一瓢Ⅱ足一本やつたらまだいい方ですよ。厩から下買うのもあるのです。すると二円五十銭で八人寄つたら結構合名

会社が出来ますねん。文蝶Ⅱ馬をコマギレにしてしまふのやな(笑聲)

貴山Ⅱ

鼻の差で負けた馬場から立つ埃り (一瓢)

鼻負けしたときは一番辛いね。一番きわどい勝負は鼻で

すね。次は頭、首、何分の何馬身と云うことになるのです。が、十馬身以上は大差と云つてこの位になるとあきらめ易い。

一瓢Ⅱよう万才で云いますなあ。鼻負けたけど舌出してたから勝ちや云うて。(笑聲)

清潮Ⅱこんな場合は、おそろく舌は出さんやろね。そんな

きわどい時には写真を裏表から撮つてあつて、それで勝敗

を定めるのですが、それが定まるまでは、本當に裁かれて

いるのと一緒です。じいつと馬券を持つてネ。

貴山Ⅱ鼻負けしたらもうその日は負け続けですな。

清潮Ⅱあゝ、もう初めに負け

たらいいませんね。

文蝶Ⅱよくそんな縁起を担ぐ

そうですが、行く時は初めから縁起を担ぎますか。

清潮Ⅱ僕は初め頃よく今日は大安や佛滅や赤口やとか云つて

暦を見て行つたもんです。私が最初に競輪に行つたのは、

うちの若い者が競輪に行つてよく休んで困るんです

よ。三日も来ないので仕方が

ない。「よし一つ見に行つてやれ」と思つてね、その時に

丁度豊中に競輪があつたので豊中へ行つたんです。其處ら

を歩き廻つたが何處に居るのんやらわからん。出車表と云うのを入口で貰つたので、それを見てると裏の方に前日の

勝負の勝つたのが一四と出ている、一四の裏だからと思

つて四一と云うのを貰つた處が、二千七百円當つた。それ

で行きしな散髪屋に行つたんですが、その時に何気なしに

見ると友引だつたので、今日は友引だからと思つてまた

次のレースも四一を買つた。そしたら若いのん一人見つけ

て、「君いかんやないか」と云うと「へえ、えらい済んま

へん」と云うて「何番買いはりましてん」云うてきくので

「四一や」と云うと、「そんなんあきまへん、三が本命で

かたいから三四買ひなはれ」と云うので、また百円出して

三四を買つた。三四も當つたが、やつぱり友引で四一も

當つて両方で四千幾らついた。歸りに一ぱいやろうと思

うと、豊中は酒を飲まさんので、何處にも酒がない。若い者が

「えゝとおまんねん」云うて連れて行つてくれた。ラム

ネに焼酎入れて賣つてますねん。其處で一本四十円のラム

ネ二本と天ふら十円で結構一ぱいやつて歸つた。何も知ら

んでもこんなこともあり

ます。

一瓢Ⅱ勝負事と云うものはよく担ぐんですが、私は担いでえらい目にあつた。正月にね

二日、三日、四日と続けて行つて飲んで喰つて残りが四千

六百円か七百円儲けた。六日から出勤だから五日の日は一

日家で休むつもりで寝ていると朝近所の馬車屋のあはれ馬

が家へ飛び込んで来ましてね子供が「お父ちゃん馬が飛ん

で来た」云うので、これやあ馬が迎えに来よつたな(笑聲)

と思つてまた行きました。それで勢ずいてるので何時も

の様にけち／＼と買わん。元氣一ぱいバリ／＼買つて、八

レースの時にはもう全財産で二枚しか買えなかつた。それ

でスツテン／＼にスツてしまつた。本當のあはれ馬でした

よ(笑聲)

文蝶Ⅱそら馬が掛取りに來たのや。

貴山Ⅱ付馬の方や、勝つて歸つたから。地方競馬で負ける

と惜しいが、本競馬で負けてもそれだけの時間を遊んだ氣

になつて一寸も惜しいと思ひませんね。ことに淀あたりは

見はらしも良いしね。景色を

見るだけでもよろしいね。

文蝶Ⅱ「そら、負けん先に見とかなあかん(笑聲)」

一瓢Ⅱ「負けてしもたらどんな良い景色見たかて良い景色なんてあれへん。」

文蝶Ⅱ

八百長かそうらしいなと

馬と馬 (一瓢)

八百長や何かでよく騒いだりしますが、実際八百長は出来ません。

清潮Ⅱ「競輪ではまあそんな事も出来るでしようがね。焼打ちやとか何か、競馬ではそんな事ありません。馬もその日によつてコンディションが違ふし、馬主や騎手や皆が揃わなければならんで八百長なんて出来ないでしよう。」

貴山Ⅱ「実力を出し切つたかどうかが問題だけれどもね。」

一瓢Ⅱ「草競馬ではあるかも知れませんがね。」

貴山Ⅱ「騎手が出る前に風呂に入つて目方を軽くするとか、馬にお茶を飲ますとか、そんな事で加減することは出来るでしよう。馬によると雨を見るとよく走る馬や色々のくせを持つてゐるものです。持馬を賣る時には八百長が行われると云うことをききました。」

清潮Ⅱ「馬に精をつけるためにまむしを喰べさしたりね、

ビール二本位をバケツにあげて飲ましていますがねえ、もつたいないなあ一寸こつちへ飲まさんかいな(笑聲) 思ひますね。出る時に目を見ますね。コンディションの良い馬は目が澄んでます。

文蝶Ⅱ「これ誰にも言うたらあかんで(笑聲) 此處だけの話や、そやないと皆が買いよる。」

清潮Ⅱ「時には間違つて当ることもある。八の馬を買うのに五や五やと思つて、思い違ひをして買つた。その五が当つた事もある。」

文蝶Ⅱ「馬の年令は人間の四倍と見たら良いそうです。馬の四才は人間の十六才位に相當するわけですが、この位の時が一番よく走るそうですね。」

貴山Ⅱ「競馬に出場するのは三才からですが、四、五才位が一番よく走るのです。」

梨里Ⅱ「近頃よく女の人で競馬ファンがあるときよますが、川柳にもこう云つた句はちよい／＼ある様です。」

夫唱婦隨やるか穴場のカツボー着 (一瓢)

女房も知らん顔して競馬に居 (沐天)

淀仁川無理に女房がついて来る (清潮)

清潮Ⅱ「今頃はすつと増えて三

割は女の人ですわね。

一瓢Ⅱ「その女の人の三割はエブロンを掛けた人がいます。」

文蝶Ⅱ「パチンコに行く様な氣持で行くのですわね。」

清潮Ⅱ「まあ女の人がするのやつたら複を買うのですわね。勝つても利益は少いが負けるのも少い。」

女房の馬券のカスも哀れなり (沐天)

女が大きな勝負をして負けたら本當にあわれですからね。」

文蝶Ⅱ

溜息へ淀の競馬が浮ぶなり (摩太郎)

貴山Ⅱ「負けたんやな。」

清潮Ⅱ「金に詰つた時なんか一つ競馬に行こか、競馬で儲けたらなんて考えているのかも知れん。」

没食子Ⅱ「鳴尾が華やかな頃の句ですが、作者は忘れました病みついて鳴尾でとられ

淀で負け

これは負けてばつかりの人や

清潮Ⅱ「私みたいなや。(笑聲)」

文蝶Ⅱ「僕の句に

女房をだました同志会

う穴場

と云うのがある。賣場に行つてじつと他人の買うのを見ていて買手のないのばかりねら

つて買う人もあります。

没食子Ⅱ「それは実感の句ですか。(笑聲)」

文蝶Ⅱ「住の江へ行つた時にね得意先の人に会つたら「絶対に内緒にしといてや」云うてまんねん。それから暫くして其處の家へ行つて「此の間は」と云いかけたらけつたいな顔してますわ(笑聲) 細君が「何だんね」云うたら「いや、前や前や、すつと前や」(笑聲) 一生懸命に揉み消しや、そうなつた動機は一枚何万円と云う穴を当てたからの病みつきですわね。」

穴馬の我にかえつた草の味 (一瓢)

と云う處ですかね。

貴山Ⅱ「駅でも競輪、競馬のポスターは貼つてない時はありませんね。情ない事ですな。」

梨里Ⅱ「競馬の弊害に就いて話し下さい。」

清潮Ⅱ「競馬の弊害と云えば借金が増えることですな。」

貴山Ⅱ「会社や何かで借金が増えて、会社を退めると云う人がよくありますわね。樂しみの程度にするといふのですが、それがもとで離縁したり、まあ夫婦喧嘩なんか一番多いでしような。」

清潮Ⅱ「うちの近所に女房に内

緒で三万円借金が出来て、それが女房に知れて里から埋て貰うたので、それから主人が置いて貰う様な状態になつて小さくなつてました。處が半年程して又借金をこしらえて、今別れるとか何んとか言うてもめてますわね。」

文蝶Ⅱ「深入りする人は年令的に云うと若い人と中年とどちらが多いですか。」

清潮Ⅱ「中年になるとまあ考えていますが若い人はみぢめです。中年の者は前からの頭で十円と云えば大したお金だと思つていたのが幾らか残つてゐるから百円のお金は大切にするけれども、若い人は百円のお金はアメ玉を買うお金です。そう云う点で違ふ。」

文蝶Ⅱ「若い人がそう云う處へ足を踏み入れると云う原因については家庭的な事情とかそんなものはありませんか。」

一瓢Ⅱ「若い人はまあ最初は興味本位で行くのでしよう。それで三遍行くと千円すつと千円のお金もこたえるから何とか取り戻そうと思つて借金をしてまた行く、負ける。また借金する。それで年中利子だけ拂つてばかりいるのもある。」

清潮Ⅱ「うちの近所に女房に内

緒で三万円借金が出来て、それが女房に知れて里から埋て貰うたので、それから主人が置いて貰う様な状態になつて小さくなつてました。處が半年程して又借金をこしらえて、今別れるとか何んとか言うてもめてますわね。」

文蝶Ⅱ「深入りする人は年令的に云うと若い人と中年とどちらが多いですか。」

文蝶Ⅱ中年になると若い者より借金も出来易くなる。大きなお金も貸してくれる様になるので、それだけ被害も大きいのと違いますか。兎に角プラスになる事は少ない。健全娛樂とは云えませんが。(一同同感の声あり) あんなのに負けた時には減多に負けたと云わんし、勝つた時には勝つた勝つた云うから、よく儲かるもの、様に聞こえるが、大体あれでちゃんと頭をハネてあるんだから、まあ損をするように出来てるのですよ。

清潮Ⅱそうです。まあ勝つ時もあるが、平均して毎月幾らかずつ損です。

一瓢Ⅱ借金が増えると会社の成績も下るしネ、勝つたら祝酒やし、負けたらやけ酒やからね。

文蝶Ⅱどうも酒がついて廻るのでネ、そこへ行くと川柳は金もいらんし、深入りすればする程人生にプラスになる。

一瓢Ⅱ句会に行つて全没になつても、やけ酒は飲みませんからね。(笑声)

貴山Ⅱ職員証でも貸すそうです。

清潮Ⅱお金の持ち合せがなくとも会社の身分証明書を見せたら飲ましてくれる。(笑声) 文蝶Ⅱあんたに信用ないけどバックが大きい(笑声) 兎に角あ、云う處は損をしに行く處です。

清潮Ⅱ儲ける心算やつたら止めといった方がよい。まあ映画に行つて帰りに喫茶店へは入つても千円位いるんだから、初めから使う心算で行くのですね。

貴山Ⅱこれは競輪ですけど、もう止めた瞳に競輪の

アトバルン (久春)

もうやめた、もうやめたと云うて行くね。

清潮Ⅱもうがついたらあかん。うちの家内はもう諦めてる(笑声) お父さん行くのはよろしいけど行くと云うとい

貰わんと、人が来ても何處へ行つたやらわからんと困るさかい云いますねん。

文蝶Ⅱそれやいゝね。ちやんと白狀しといて行かんならん

清潮Ⅱ處が知つた人が来て呼出しをかけよるねん。恰好が悪いしかなわん。呼び出さんといてくれ云うとくのに呼出しよる。またそんな行つたらろくなことあれへん。スツ

てしても「金ないか」にきまつてる。

文蝶Ⅱあんな處で逢うたら先に「今日は負けた」と云うとくんやな。

貴山Ⅱ貸すと云うことは嫌いますね。縁起を担ぎますねん。タバコの火でも貸してくれ云うたら黙つてマツチを出す。吸いとる云うてね。

一瓢Ⅱ肩へ手を掛けても怒りますね。押さえられる云うて。貴山Ⅱあんな處へめくらが来たりしてますが、一体どんな心算で来るのか不思議に思ふのです。

清潮Ⅱ私、聞いて見たんです。そしたら「良い馬が此處へ来たら感で判ります」云うたので参つたね。音でわかるんだすな。

文蝶Ⅱめくらなんか矢張り勝つのが目的で来るのでしような。

清潮Ⅱ深入りせずに淀なら淀だけにきめとくのですね。

一瓢Ⅱ他人にはそう云うねん 文蝶Ⅱそれ理想やがな。

一瓢Ⅱ私は三百六十円儲けて五百なんぼ損をした、それつきり本當に止めました。

浸食子Ⅱ僕は入場無料やから見に行くんです。たまに買うこともありますが百円しか買わない。それで儲けても十円

位だし、損をしても百円ボツキリです。百六十円儲けたのが一番最高です。

貴山Ⅱ予想屋と云うのは良い商賣ですな。鉛筆一本で紙切れに一寸書いて十円やからね。封筒に入つたのは百円もするのですよ。責任もなにもないしレースが終る頃には其處らにおらん。(笑声)

文蝶Ⅱやはり血統とか、馬の事もよく知らないかんしね まんざら根拠がないわけでもないでしようね。

一瓢Ⅱあんなのは大抵競馬に凝つてつぶしたなれの果でしようね。

清潮Ⅱ予想屋になるのに試験があるのですよ。

貴山Ⅱへえ、そうですか、そうすると僕は成り下つても予想屋にもなれんな。(笑声)

浸食子Ⅱ午前中に予想を賣つて儲けて、そのお金で午後になると買うのですよ。それで帰る時にはスツて元の空っぽになつて帰る(笑声) 予想屋やつたら儲けそうなのですかね。

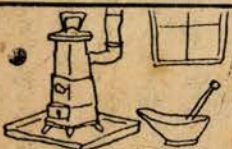
文蝶Ⅱ予想だからね。負けることもある。

清潮Ⅱ色んな事を調べると、どの馬も強そうで段々わからなくなつて来る。(笑声)

貴山Ⅱ大映の永田社長の馬が

死んだ時に新聞に写真まで出て二十行程の記事が出たが、人間やつたら名士でも三行位しか書いて貰えん。(笑声)

暖房の  
一ぱい!  
又格別



アサヒビール

(梨里筆記)



花嫁の提灯竹藪ぬけてくる  
尼崎市 水谷 鮎美

二号宅こゝは麻雀するところ  
大坂市 市場 汲食子  
ニコソンの群が見ている草野球  
阿片のような女にしがみつかれて居  
横浜市 福田 山雨楼

友情の握手政界らちもなし  
妻の作謠も時折腹の足し  
ホノル、市 内藤 草一郎

もの足りぬ夫事業の虫のよう  
同伴のおよばれ妓は遠く坐し  
片書きも入れて藝者に紹介し  
風邪引いた様なものだよ恋なんて  
チャンスだが然し子の顔妻の顔  
晝の猪口窓の陽差しに坐り替へ  
やけ酒の藝者に花代まで拂ひ  
妻いとしだん／＼地味な柄が合ひ  
取り戻すつもり寝化粧寝香水

大坂市 井上 湧三

長閑さよつとけ三百六十五

お元日右も左もなかりけり

米子市 三 鴨 美 笑

下積みでおわる男で慾がなし

仲人を頼まれ足袋を買いにやり  
角がたつような氣持で貰つとき

ホノル、市 白 砂 旋 風

年末は暮しが顔に出て仕舞い  
戦争に間に合ふやうに子が生れ  
ダクターも人間痛で死んで行く

布施市 吉田 水車

買うて来たようにも見える茸を提げ  
早口に言うてパス嬢負けて居す  
人生五十年失業が待つて居た

君もなか／＼やるじやないかと社長が來  
文化勳章貰らややつぱり俗な顔

鳥取市 大西 八 步

まだ慾があつて母親達者なり  
人造米刺身で食べる米でなし  
芋虫に似て冬の日を漬ぶくれる

大岡市 須崎 豆 秋

隣まで来た保険屋へ戸を閉める  
腹工合わるし大金持たされて  
横断をわざとのつそりのそり行き  
言いこはないがと人の子を叱り

池田市 黒川 紫 香

一円のつりを走つて来て渡し  
親と子が辻で別れた朝の霜  
同期生飲もか／＼とやつて来る

大岡市 丸尾 潮 花

いくらかにして来る心算化粧する  
恋のない証抛娘はとがりきり  
ものごとく感謝してたら立ち遅れ

大坂市 北川 春 巢

奥さん／＼とかつき屋同士なり

妻は酒医者は煙草をやめと云う

スクーターで来た友情はすぐ帰り

丸万で君と飲んだと思ひ出や

お酒でも出せと病人氣を使い

金ですむ心配事と羨まれ

奈良県 尾崎 方正

腕時計じつと見てゐる失業者

周囲から詰まないやうにした將棋

喋り散して診断聴かず去に

野に降りて虫を聴くほど老いてゐす

岡山県 浜田 久米雄

人生は水の流れのままでよし

当分はちろりにほこりついたまゝ

いそがしいつるべの音も十二月

岡山県 逸見 灯 竿

パチンコで映画歸りの妻を待ち

乗り後れ又すき焼へ戻つて來

大坂市 武部 香 林

スポーツ欄の外はどうでもよい若さ

パン／＼とは云わす孝行してくれる

押し賣りに負けてる妻の美しさ

岡山市 大森 風來子

十代で嫁いだ母で苦勞性

横丁へ曲る十代手を挙げる

大岡市 水谷 竹 莊

はしやいでいるはず恋が実を結ぶ

役得と思つてしたが罪になり

本式に小唄を習ういゝ暮し



下関市 弘津柳慶

貰うたか買うたか彼女金時計

鳥取市 河村日満

末つ子へいつか愛情かたよれり  
晝間からチークダンスに酔しれる

膝まくら不倫の恋もはてしなく  
人前のつらさはきみの名も呼べず

行商へ氣のいゝ母がお茶を出し  
床の間も佛も菊菊菊で埋め

出戻りの細く悲しき咳をする  
パン／＼と言ふ名に怖じず晝を出る

晩酌がまだすまぬのに客が来る  
山口県 長野井蛙

この人も師を呼び棄てに趣味を説く  
兵庫県 家沢芳花

下関市 國弘半休門

手紙では届く本社が見当らず  
朝酒へラジオは持株又騰り

長生きは柱時計と僕ぐらい  
熊本市 西口如川

京都市 大鶴喜由

花火にもあいた脊中の子の欠伸  
大阪府 森下愛論

でんやわんや二号も坐り込むと言ふ  
徳島県 福島鉄兒

かまきりの妻へひし／＼迫る冷え  
たれがどう言おうと主のすきな柄

息しても聞えるような村に住み  
お目出度いからお世辞など言うてやる

大猫も飼うて生活は樂ならす  
父の死へみんな涙を忘れて居

年の瀬へ今年も同じ貧しきか  
漸くに女房の美点眼にこまり

ちと足らぬくせにお世辞のうまいこと  
都会の哀愁階上喫茶もたそがれる

輸入品こそ法隆寺と写真機と  
赤瓦村一番の愛妻家

拾年もたつて魅力がまた違ひ  
吹田市 野本吞水

忙しい筈が二号邸で起き  
岡山県 直原七面山

恩師の家コ、ダ／＼と犬が吠え  
生きるんだ怒濤の中に生きるんだ

賃編へうどんの箱で晝がすみ  
生さぬ娘は給食だけの腹に馴れ

豪溪で神の御業に斯うも酔い  
豪溪の岩落ちそうなの

特集は博士々々が執筆し  
邪魔者は実は正義の人だつた

本読めば味はえといふ父をもち  
ロンドン土産犬にはかせる靴をくれ

冷かしえ頼も初めない女事務  
現実には遠く筏の流れ来る

青年の活氣はつきり硝子越し  
兵庫県 榎南夏六

柿一つ残つた枝の高いこと  
大阪府 富岡淡舟

心ブラではなしサンドウィッチマン漫歩  
奈良県 飯降白雪

何とかわつてます程度の背廣着て  
次から次と女邪推の続く夜

よりそつて夫の抱負をきいてゐる  
これからと言ふに二度目の妻は死に

名園の外に並木は枯れてゐた  
父母ありき娼婦の胸に秋の風

弱虫がにらんだ涙貯め乍ら  
岡山県 横部牛歩

奈良県 西辻竹青

巻物の様に秋刀魚を猫くわえ  
はだか一貫ぬすつと猫はたくましく

妻と子と話すボーナス恐ろしや  
岡山県 服部十九平

握力計あはれ枯れゆく年となり

妻と子と話すボーナス恐ろしや

農繁期妻サービスの卵焼き

奈良県 西辻竹青

巻物の様に秋刀魚を猫くわえ

農繁期妻サービスの卵焼き

握力計あはれ枯れゆく年となり

妻と子と話すボーナス恐ろしや

農繁期妻サービスの卵焼き



田圃の中にバーマの店が建ち  
居残料だけを飲む氣の繩のれん  
ベルシヤ猫膝に夫人はよく喋り  
市会二派中央市場の位置で揉め

岡山市 大森娛句樂

女学生道一ばいに喋りたて

兵庫縣 若林草右

灸あてで前に診たのを思出し

物理学者

討論になつてマイクに日本語

大阪市 足立春雄

反撥も出來ず組織の下に居る

熊本縣 有働芳仙

又水がと思ふ所に人の棲み

長期スト工員なんてやめちやおか

今のうち金蓄める氣で再婚し

朝飯は父ちやんが炊く綴方

高知市 太西迷窓

青い眼の子も夕焼を唄つて

離婚して花の師匠で起つ氣なり

下関市 石川侃流洞

日曜日父を独占するブラン

あきらめのつくまで泣けと月の澄み

俺の影ゴウ／＼幟いて列車過ぎ

広島縣 山田季贊

稻刈の蝗津波の如く逃げ

頭割りはんばは何時も損をする

岡山縣 水田千石

教養があつて終点迄立てり

手傳いの鎌サク／＼と音がせず

棟梁の自分の家はまだ建たず  
遅刻の子今日は違つた嘘を云い

大阪市 山本葉光

卵生むニワトリを食う店じまい

期待して呉れなと我が子の強い事

倉敷市 木村千客

菜園へ慾得でない顔でたち

究極の庭は自然の山なのに

二号でも置けると本家は殊勝なり

ふく娘さげて正月札がくる

還暦を生きぬく妻と思わざり

石川縣 那谷光郎

アパートは下手なギターも聞くとこ

安い時に買ったを時價に積つて見

恋人が欲しいあせりのタイを替へ

大阪市 木村水堂

あきらめることに馴れる小市民

裏付けのない同情はしてくれる

水にさえ金が要るかど里の母

堺市 八木摩天郎

先生句集編纂を手伝ふ

地下からも喜ぶ人の声がする

音沙汰も無きシベリアへ踏みミシン

高槻市 福田丁路

蜿蜒と続く悔みに肩がこり

役得の後の崇りに氣がつかず

負けるものかと氣合をかけて稻を刈る

鬭争を餘所に魚釣る人もあり

倉敷市 水谷谷水

生活の刷新妻も変へたらし

自殺した部屋でも権利金どる世  
飲めば済む会議に異議のある若さ

倉敷市 梶原一善

生き抜くはかくもきびしき猫すてゝ

惚れた弱身雨にぬれて待つ

附合つて見ればアンタも平凡ね

クリームだけは妻も老いたもの

岡山縣 田村藤波

茸狩のはぐれし人を呼ぶ術

欠席へあつらえ向の風邪をひき

仲直りする氣か髪をときあげる

岡山縣 岡田夜潮

意見して帰れば妻に意見され

子沢山番号に似た名を付ける

氣がかりは突き衿に出る灸の痕

岡山縣 坂井三葉

よう刈らぬ養子は鎌のせいにする

流れには従うものと今解かり

万引に巡査と同じ子が五人

岡山縣 政田大介

相惚れへ邪魔な一人が居残りし

勘当をされた手紙をボーと捨て

田舎者と見られどうないチツブ切り

岡山縣 白井三林坊

助けてよと云ふ程女酔うていす

男子意氣に感ずと社長言つた筈

オイなんて呼んではいやとハネ返し

あんただから話すんですが妻が逃げ

よその子にやさしい妻が子を生ます

大阪府 青柳扇子仙

1





# 川柳大学 (VIII)

川柳と表現

福田山雨楼

## 表現の意義

川柳文学の研究には幾多の部門があり分野がある。これまで本講で述べてきた一、川柳と藝術の關係、二、川柳と文学理念、三、川柳と詩精神、四、川柳の体系即ち學問的分類、五、川柳の本質探求、六、川柳の内容検討、七、川柳の形式論攻などいすれもみな重要な部門であるが、これから述べようとする表現と云う分野もまた極めて大切な項目で、おそらく眼目とも云うべきものではないかと思う。藝術は大まかに云えば表現に歸するものである。音楽、美術、演劇、文学みな美の表現に外ならない。中には眞実を追求し或は善意にあこがれる表現もあるが中心は美の表現にあるのである。それぞれの藝術が持つ独特の表現形態が最も洗練された技巧と、魂を打ち

込んだ精神力によつて高度に發揮された場合藝術美は輝くのである。

川柳の藝術美も同様で、あくまで洗練され選択された言葉によつて、心に宿つたおかしみの詩情が、最も巧みに効果的に表現された場合生きた句、秀れた句が生れるのである。僅か十七音字の短詩形の中に川柳の風懷を盛り込もうと云うのであるから、言葉に對するよほどの圧縮、省略、推敲がなされなければならぬことは多言を要しない。だがここで誤解を避けるため特に申添えたいことは、表現と云えば修辭や技巧の末節に走ると早合点され易いが決してそうではない。言葉を大切にし、言葉を尊重し、言葉を愛することは、人間の精神を重んずる所以であるのと同様に、川柳の表現を通じて言葉を磨き、言葉を選択するの

は詩の本願である心の奥の眞實の声を表わすことに外ならない。飛行士が愛機の性能を点検するのと同じところである。それほど表現と云うことは生命的であり、實際的であり眞剣そのもののなのである。川柳表現の研究にはこれまた色々の課題があるが大別して一、何故川柳表現をするか、即ちその契機、目的の究明、二、何を表現すべきか、即ち川柳の対象、客体の解明、三、如何に表現すべきか、即ち技巧乃至推敲の検討に分けて考察を進めて見たいと思ふ。

## 何故川柳表現をするか

われわれは何故川柳と云う詩的表現を選んだのか、どう云う動機でこの詩をつくり始めたのか、おそらくこれは十人十色で各自異つた契機によるものであろうが、規範的、

類推的判断はできる。即ち先ず自動的、主體的な契機によるものと他動的、客體的な契機によるものとに分けることができる。自動的な場合は表現慾、創作慾にかられて作らずにいられないもの、餘技説と云つて餘暇生活の趣味化をねらうもの、快感原則による行動即ち好きで楽しいからやるもの、娯樂、遊び、慰安といった方面から選ぶもの、藝術美えのあこがれ、川柳の醍醐味に參入するもの、日記或は記録をつけるような氣持から始めるもの、川柳向きの性質即ち先驗的資質によるものなどがあげられる。次に他動的な場合は社交つきあいとしてグループと共に楽しむもの、功名心、射倖心、競争心から始めて始めるもの、句会や連座の雰囲気やスリルを愛好するもの、風流心、生活逃避の手段とするもの、傳統尊重或は革新の情熱に燃えて飛込むもの、先輩同僚の勧誘によるもの、國民的公憤、社會淨化の念からその手段として川柳を選ぶもの、報酬や稿料目当てに句を作るもの、懸賞屋も同類、名句秀吟の刺戟共感により自分も作つて見たくなるもの、慣行や情力に支配せら



雜筆

春秋

川柳と言ふ流儀

丸尾潮花

「川柳雜誌」を手に入れた舞踏家のT子さんが私に、此の麻生路郎先生と言ふ方は新聞やラジオでよく知つていますが、此の方は川柳の家元さんですか？と尋ねられた。私は一派の主筆である以上立派な家元さんですねと答えると、矢張り舞踏の様に名取りさんと言ふ風な方も沢山居た。先生しやうねと再び質問されたのでから選者として認められた者が名取りと言ふことになりましたと答えると、川柳の家元さんで沢山の流派が有つて家元さんも沢山の流派が有つてですかと平然として尋ねかけられた。私はお可笑さを噛み殺して一流社、二流社、三流社、雜草と、とても終戦後舞踊の流派が増える様に川柳も増えて居ますね、ひどいものになると十人足らずのお弟子さんをもつ家元も居りますがね。そんなにわずかな人数でも家元さんになれるのですかと眼を丸

れて作るものなどが考えられる。勿論これらの契機が複合する場合も少なくないであろうし、次から次へと契機が変化したたり飛躍する場合もあるであろう。また契機が單一、清純であるから永続することも限らないし、契機が複合し明確を欠くから云つて不純であることも断じられない。要は各人の個性、資質、環境に従つて一旦つかんだ契機の純正をはかり、作句信條の強化に努むることが肝要である。興味に端を發した川柳作句も、技法の練磨と相俟つて血肉を通じての自我の表現となつてこそ尊いのである。川柳を遊びや娯樂の手段として弄ぶが如き境地から眞に生命のこもつた、人の肺腑を衝くような句が生れる筈はないのである。つまり川柳人の作家的自覚と文学的成長とが望まれるわけであつて、何故川柳を作るかと云う自己批判の上に立つて次に來るべき「川柳は何を表現すべきか」「如何に川柳表現をなすべきか」の問題と対決すべきである。何故川柳表現をするか」と云う問題を考えることは、常に振出しを忘れぬことであり、足元を見失わぬ様に心掛けることであ

### 川柳は何を表現すべきか

俳諧文学の一般通念からすれば俳句は季題を入れて季感を詠う風物詩であり、川柳は世態人情を詠う大衆詩であるとされてゐる。また俳句は生活感情の素直な眞面目な表現であり、川柳は庶民感情の諧謔的、諷刺的表現だと云われてゐる。文学理念から云つても史的沿革からしても、兩者の間に自ら異つた風韻の存することは明らかなのであるが、近來の傾向は兩者の關係を混濁ならしめる素因が少なくない。即ち俳句にあつては人間探求派、無季俳句の擡頭があり、川柳にあつては自然現象の写生、即物的表現などがあつて紛らわしい。しかしそうした交流的繁雜の邪道的逸脱はいつの時代にも起り易いのであつて苦にするには当らない。川柳人としては俳句の動向を注視しつつ、自らの嚮うべき通を踏み誤らぬよう精進をつづけるべきである。川柳の正しいあり方を把握し

てその成長發展を図るべきである。

ではその川柳の正しいあり方、川柳の嚮うべき方向は何かと云うことになるが、これは前講で述べた川柳の本質論、内容論、形式論を繰返すより外はない。そこで本講ではその繁を避け主として表現と云う立場からのみこれを論じて見たい。先ず第一は現実と云う対象のことである。われわれは現実を観察し、理解し、認識することによりそこから批判が生れて來る。同情や願望や憎惡の心が湧いて來る。それらの心を川柳の表現に託するにはおかしみの詩情と云う篩にかけて残つたものを拾ひ上げねばならぬ。あらゆる思想や感情がみな川柳になるとは限らない。川柳の表現にふさわしくないものもある。その点を取捨選択して川柳の意識に乗せ發想の契機をつかむべきである。ユーモアは川柳の全部ではないが仮りにユーモア一つを取上げて見ても、リアルなユーモラスな点景が如何によく川柳とマツチするかを考えるべきである。また笑いは川柳の典型に過ぎないが、藝術的笑いが如何に高い人間的態度であり

社会的態度であるかを知るべきである。一詠笑いを誘う皮肉な諷刺の中に國民感情としての不平不満が結晶したような一句が、如何によく川柳の持ち味を生かすかを忘れてはならない。

第二はフィクションの問題であるが、川柳の虚構的表現は餘りにもその例が多く、課題吟などの着想はその大半が虚構の句と云つても過言ではないであらう。虚構の句は一步を誤れば觀念や言葉の遊戲に陥り娛樂に轉落してしまふが、理想や倫理を強く追求した藝術味豊かな一句からは、リアルな句とは別な眞実が迫つてくるものである。

川柳は言葉を最も大切にす文学であることを多年力説されてゐる劇作家川村花菱氏は最近「われわれ川柳愛好者は古川柳に表現しつくされた感覚以前の新しい視野を拡張め、超越した新感覚の發見とその表現によつて新川柳の道は洋々たるものではあるまいか」と述べていられるが、現代に呼吸するわれわれが捨身になつて対決するとき、必ずや川柳素材となるべき新感覚をつかみ取つてくるべきである。

くして、私の顔を不思議そうに見詰めていられる。柳界で認めなくとも自分で認めているんですね、名刺などにも大変な肩書を入れましてね、うつつかりすると買いかぶる様なことになりました。〇〇川柳社主宰などと書いてね、訪ねて見ると愛好家が五、六人寄つて夕方から集まつてやつてまんねんと言う様な式でね。ヘエー、でもそんな家元さんやつたら自然信用もないしすぐつぶれるでしよう。つぶれますね、でもすぐ又どうかへ喰ひ付いて行きます。川柳で随分変わった自由制度があるんですね、でも麻生路郎先生などは本當の家元さんでしよう。新聞やラジオにあれだけ名が出て居られるんですね。まあ日本一、世界一の家元でしようなあ。それでは潮花さんなどは名取りさんでしよう。無論名取りですがねえ。矢張り舞踊みたいに名取さんになるとお金が沢山要るんでしよう。お金ですか。ええ、それが要りまへん。月謝に似たものが百円月一回の会費が五十円、それで雑誌まで貰えるんですね、あんたも舞踊を止



## 如何に表現すべきか

川柳は如何に表現すべきか  
と云う問題についても、その  
本質、内容、形式が基盤とな  
り、技術と推敲によつてそ  
れらのものを如何によく生か  
すかと云うことに盡きるので  
あるが、今少しく項を分けて  
検討して見よう。

先ず第一は俗語、口語体の  
使用である。短歌や俳句の多  
くが文語体或は上品らしい言  
葉を使うのに対し、川柳の碎  
けた言葉の表現はたしかに特  
殊性を持つ。試みに路郎先生  
選にかかる山陽川柳及び本社  
句会兼題吟の天位の句七十一  
句と新川柳評釈百句の中から  
二十九句合計百句を拾つて調  
べて見ると、文語体の句は僅  
かに一句あるのみであつた。  
大部分は口語体の句でその中  
会話体を取入れたもの六句、  
俗語を用いたものが十二句あ  
つた。

第二は連用形である。故武  
田杵太郎は「川柳が發祥する  
始めから考えても、連句の上  
の句としてその句勢があつた  
何ものかを持つ心持を有する  
事は自然である」。「川柳句の  
時限、動詞の時限に直接法半  
過去がある。川柳はその過去  
の現在を表現する句法であ  
る。川柳が前句附から轉化し

た結果は自然に表現法に於て  
過去時の現在に中心をおいた  
ことは否定しがたい」このべ  
たが連用形の表現をとつた句  
は餘りに多い。前記百句の中  
にもこれを六十九句算するこ  
とができた。

第三は常套語の使用であ  
る。路郎先生はかつて本誌に  
「句作上の常套語」と題して  
研究を發表されたが、なり止  
め、こと止め、さ止め、か止  
め、けり止め、し、來、居そ  
の他の連用止め、口語調の  
句、名詞止めの句、音響語、  
疊み句など古川柳にその例が  
多く、現代句にもしばしば散  
見されるのである。

第四は省略である。圧縮さ  
れた言葉には省略は附きもの  
で言外の餘韻は句の味を深か  
らしめるに役立つ。前記百句  
の中にも

更年期内科外科齒科忙

しい

ハゲ位嫁きます別荘自家

用車

史 球

など秀れた省略の句が少くな

い。

第五は表現の多様性であ

る。臨機應変、活殺自在、融

通無碍、その素材内容に應じ

て縦横に言葉を使駆するの妙

味は正に川柳の独壇場で、警

句的性格を有する点俚諺と一

脈相通するものがある。「日

本の諺」と云う本の解説に比  
喩法、諷喻法、対比法、対句  
法、漸層法、誇張法、擬人法、  
韻律法、韻文体などをあげて  
いるが、川柳の語彙に対する  
敏感性、今日性には更に鋭い  
ものが盛られてゐる。

最後に技巧と推敲について  
語らなければならぬ。修辭  
の技術と推敲とは表裏一体で  
あつて芭蕉は「舌頭千轉」を  
説いたが、ゾラがモーパッサ  
ンに教えたように「本當の言  
葉は一つしかない」のであ  
る。苦吟に比例して秀句が生  
れるとは限らないが、安易に  
乱造するところからは決して  
人を感動せしむる句はできな  
い。句会競吟の通弊として川  
柳人は多作を手柄にするが実  
に危険なことである。平凡な  
百句よりも生命ある一句を選  
ぶべきである。よく「川柳を  
ひねり出す」とか「五句吐」  
などと云うが、川柳は人形師  
や菓子を作る職人ではない。

また「川柳は鉛筆一本あれば  
誰にでも作れる」と云うが、  
同じ鉛筆一本からでも湯川博  
士のような大発見もあるので  
ある。要は鉛筆と紙とを媒体  
としてわれわれの思想感情を  
最も切実に、效果的に表現す  
ることを念とすべきである。  
句作表現上の苦心は心を練り  
心を磨くことにつながつてこ

## 謹賀新年

阿 万 万 的

間 島 青 丹 子

松 川 杜 的

正 本 水 客

大 万 川 柳 会

松 江 梅 里

そ、はじめて本物となるので  
ある。換言すれば、如何に表  
現すべきか、と云う問題は、  
如何に生くべきかと云う問題  
に帰着するのである。

## 結 び

藝術は表現であり川柳は生  
きた言葉である。表現はまた  
花であり実である。これをよく  
開花せしめ結実せしむるに  
は、詩精神と云う空氣と、文  
学的表現、技巧と云う温度  
と、時代感覚と云う水分とを  
送り込み、根幹枝葉を正しく  
逞しく育てあげなければなら  
ぬ。

## 瓶の銀山

大阪市大宮區長柄  
西通一丁目四四

山 銀 硝 子 株 式 会 社  
電話 樹川四四七番

めて川柳の名取りでもされたらお  
金が要らずに、一生明るく朗らか  
でいいんですがねと言つと、もう  
一つお聞きしますけれど麻生先生  
のお流儀は何流ですのお花だつた  
ら遠山とか末生とか池の坊つた  
るでしよ、舞踊にも尺八にもそ  
れ、流儀が有ります様川柳に  
だつて家元さんがあればお流儀が  
あるんでしよ。有りますね麻生  
路郎先生のお流儀は川柳です。川  
流ですつてT子さんは狐につま  
れた様な顔をして、私の眼をじつ  
と見詰ながらお流儀ですよとかさ  
ねて聞かれる。私は笑を噛み殺  
しながら、だからお流儀は川柳  
やと言てるんですよ。それそ  
の雑誌の表紙にも「川柳雑誌」  
と書いてあるでしよ。ええ彼女  
はわかつた様なわからない様な顔  
をして口の中でもう一度川柳と繰  
返しながら、ふふ……と笑つてい  
た。

## 人間横丁 (Ⅸ)

## 女体の圖

東野大八

明けましておめでとうございませう。

はじめに、かく新春の賀詞を申述べさせて置いて相も変らず、筆者独り勝手の手前味噌を今年もいゝ氣持で書かせて頂くことにする。

さてこゝにあるトッパン、とくと御覽下されたい。これはダリのデッサンでもピカソの戯画でもありません。私の友人Tが夕刊のカイものになつてゐる彼担当の一文に用いた略画である。題して「近代女性氣質の象徴」という。

これを説明するところである。女は口と胃袋と生殖器とスタイルブックによつて構成されている。胃袋の中にあるは、おしろい、あんみつ。手にするはスタイルブックと小粋なハンドブック。このハンドブックの中味はコンバクトと紅棒とハンケチとなんとかゼリー。

「近ごろ女性の生體はかくのごとく頭部を失つた一生物であつて本態を粉飾した單なる有機物にすぎない」



彼のこの画に寄せる言葉はこれであつた。

ところがである。これが一度掲載されるや、ガゼン大反響、アチヤコ君十八番のいゝ草ではないが「エライことに、チヨトになりけりやがな」という始末となり、怒るはこれ女性にあらずしてなんぞやの態たらくとなつた。

「女はかくのごとくなりときめつけるならば、男たる生物の構図はけだしゴヤの人獣画もたゞならず」

とて紅焰いと懐じい限り、要す

ある。彼はげんなり、私は嘆息した、というのは、これにはワケがある。

これを原稿にする数日前、Tは私に、問題の画を有合せの紙に描いて示し、彼の筆にした意味のこゝとをいつて、私の意見を求めた。

私は單なる茶のみばなしの一つと書いて「当世女氣質の構図といえ

ばいんことない、風俗時評の一カリカレとみるならばね」と返事をして「少しアルコール分をまぶしてもいゝね」とわらつて補足した。夫子自身そのときすでに、少々風酒を胃袋に収めていたから

でもある。私という人間は、この種の液体が身体に入つていると、

万事点線より直線を導しとする。いわんや皮肉屋の川柳人を自負すれば、あるはた明快な断定観あるのみ、一言吐いてその趣きまこ

とに快よければエヘ、ともい

う。Tはその場合、その私の笑いを至極がんにく富んだ同志的共感の表明とみた。かくて憚るところなく活字にしたという次第。随

つてこの悪評については、桂小五郎みたいな顔でいた私にも一半の責任があるというに相なる。

大なり小なりモノを書く人間には、なんらかの形でその書

いたものに対する反響をどことなし氣にかけてゐるものだ。書きと

ばし言ひ放しのそれつきりであら

れる人間は、そう多くはないと私はいつも考へてゐる。悪ければ悪い、いゝならいゝと、誰かゝらわ

ずかでも言つてくれるのを待つてゐる。うんとすんともいわれず

黙殺されるほど、その筆者にとつて張合のないものはない。あると

きは侮辱とも考へて、くさくさする。余人は知らず私はその一人だ。若いTの場合なぞ、これがテ

キ面に応えたらしい、強い自信と誇りで苦勞しぬいて書いていたそ

れだけにこれを地上最大のショウウがない愚説、と片づけられたので

は、立つ瀬は肚の筋ばかりであろ

う。私もこんな経験があつた。四国の新聞社で柄にもなく論説委員主

査といふのをやらされた。田舎新聞でも社説には社説としての貫録

がなければならぬ。十人委員がいて月四回ずつ輪番で書くことに

なつてはいたが、各委員一癖も二癖もある連中ばかりで、月四本ど

ころか年一本も難しいのが半分以上

およんだものだ。たゞかれてこそ一人前だ、といとねんごろに社長

はなぐさめてくれたが、一人前になるまでこちらの身がもちませ

んと、と社をサボつて酒ばかり飲んでゐた。だが筆を折つては私は

めしの食ひあげである。大悟一番、改めて高野山の山道を上る氣になつて出直したもんだつたが、

Tはどうか。彼黙して語らぬ。

「ねえ君、仕様がないうさ、思ひきりこずかれてみようや、まさか

生命までとらうとはいふまい、万

事われわれ輩への大衆の毒舌には底があるからね」

そういつて年の功でこんなこと

もそこで私はつけ加えた。

「われわれの新聞は部数十五

万、二人読んでるとしても三十万、これだけの人間を相手にモノをいうんだから、ことは大變だ

「近ごろ女性の生體はかくのごとく頭部を失つた一生物であつて本態を粉飾した單なる有機物にすぎない」

「近ごろ女性の生體はかくのごとく頭部を失つた一生物であつて本態を粉飾した單なる有機物にすぎない」

「近ごろ女性の生體はかくのごとく頭部を失つた一生物であつて本態を粉飾した單なる有機物にすぎない」

「近ごろ女性の生體はかくのごとく頭部を失つた一生物であつて本態を粉飾した單なる有機物にすぎない」

「近ごろ女性の生體はかくのごとく頭部を失つた一生物であつて本態を粉飾した單なる有機物にすぎない」

「近ごろ女性の生體はかくのごとく頭部を失つた一生物であつて本態を粉飾した單なる有機物にすぎない」

「近ごろ女性の生體はかくのごとく頭部を失つた一生物であつて本態を粉飾した單なる有機物にすぎない」

「近ごろ女性の生體はかくのごとく頭部を失つた一生物であつて本態を粉飾した單なる有機物にすぎない」

「近ごろ女性の生體はかくのごとく頭部を失つた一生物であつて本態を粉飾した單なる有機物にすぎない」

「近ごろ女性の生體はかくのごとく頭部を失つた一生物であつて本態を粉飾した單なる有機物にすぎない」



# 言葉のさわり

川村花菱

ラジオの童話劇を聞いていたら、内容が昔の物語であるのに、

「説明すると長くなるが……」と云うせりふがあつた。

従來の表現から行けば、

「話せば長い事ながら、」

とでもあつてほしい所なのに、あまりにも散文的な言葉

なので、私はなまじり氣持

になつた。童話劇だから、せ

りふなんか分りさえすればい

ゝと云えばそれまでかも知

れないが、此の分りさえすれ

ばいゝと云う態度の文章が終

戦後あまりにも横行する事

に、將來日本の文藝はどうな

るか、作家と云うものの責任

はどうするのかと不安になる

「はなせば長い事ながら」

とか「語るも聴くも涙なり」

と云う種の言葉はそれ自体極

めて古いもので、その言葉を

使う事に由つて、作全体に古

さのにはいがあふれて仕舞う

かも知れないが、頭にまげを

のせた人物の口から、「説明すると長くなるが……」云う言葉がそれとしたり、全く味もそつけない事ではあるまいか。

生きる爲に毎日たべる米のめしにも、あるいはこわかつたり、やわらかだつたり、その日その日の御はんの炊き方にも、それ／＼の味があるものだ。同じ人間にも味も風味もある人もあれば、丸たん棒のような動物としか考えられないものもある。

文学のうまい人ますい人、川柳のうまい人ますい人、私共は毎日そうしたものを経験するが、文章でも川柳でも、そのうまいすいの岐れ目は、作者の感覚の問題が重要なものである事は勿論だが、猶その上に言葉のよさわるさが一番大きなものである。

川柳家が自分の考えを句にする場合、言葉以外に表現の

方法がないのだから、その言葉の選択を忘れては、いゝ川柳が出来るわけはない。單なる説明の言葉は詩ではない。

自然主義文藝の華やかだつた頃、此の説明と描写と云う問題がしきりに論じられたが、写生と描写とはちがうように、説明と表現とは大したちがいである。

古い言葉だが、物を表現する時の言葉は、たつた一ツしかないのだから、その唯一ツの言葉を発見する事が、作者の義務であり、生命であると言へ云われて居る。

川柳は詩であると同時に音楽でもあると私は信じている。

適格な日本語を探す事が、川柳を作る上に一番大切な事であると同時に、その言葉に音楽的なものがなくてはならない。即ち、言葉の持つ味わいの上に、さわりがなくてはならないのだ。言葉のさわりとは言葉の持つ味わい、餘韻、ひびきとも云うべきもので、適格な日本語に由る表現の上に、更にその言葉の中に「さわり」のある事が、よき川柳となるのである。

いつかも何處かで述べたと思うが

川柳家が自分の考えを句にする場合、言葉以外に表現の

方法がないのだから、その言葉の選択を忘れては、いゝ川柳が出来るわけはない。單なる説明の言葉は詩ではない。

自然主義文藝の華やかだつた頃、此の説明と描写と云う問題がしきりに論じられたが、写生と描写とはちがうように、説明と表現とは大したちがいである。

古い言葉だが、物を表現する時の言葉は、たつた一ツしかないのだから、その唯一ツの言葉を発見する事が、作者の義務であり、生命であると言へ云われて居る。

川柳は詩であると同時に音楽でもあると私は信じている。

適格な日本語を探す事が、川柳を作る上に一番大切な事であると同時に、その言葉に音楽的なものがなくてはならない。即ち、言葉の持つ味わいの上に、さわりがなくてはならないのだ。言葉のさわりとは言葉の持つ味わい、餘韻、ひびきとも云うべきもので、適格な日本語に由る表現の上に、更にその言葉の中に「さわり」のある事が、よき川柳となるのである。

いつかも何處かで述べたと思うが

## 謹賀新春

中島生々庵

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

木村孤浪

平塚市馬入二九〇九

川雜西成支部

土井文蝶

大阪市西成区松通九ノ二二

謹而新年の御祝を申し上げます

昭和二十九年元旦

石居高志

大阪市天王寺区上本町九丁目十八  
永楽輪業(株)大阪出張所  
電話 二二五九七番

大西迷窓 生島鳥語

高知市追手筋五七  
入交試験所内  
大阪市北区天神橋  
筋一ノ二七

○辻番が棒持つて出た分の事

と云う柳樽の句があるが、これは

○辻番が棒持つて出ただけで済み

と云つてもいいわけ、句の内容はそれ丈のものであるが、後者は散文的説明であり、原句は詩であり描写である。現代の川柳にいくに多く

此の後者に属する散文的説明の句があるか多くの雑誌のどの頁にも、必ずそれが発見される。此の「分」と云う言葉は、「娘分」「客分」「兄弟分」などの分で、字引で引けない所に言葉の味があるわけだ。

重ねて云うが、十七字の散文は川柳でもなんでもない。只のはなしだ。否なまじ音律を踏んでゐる爲に、はなし以下のものである。

川柳は、はなしではない、我々は勉強して、歌をうたおう、一生懸命「さわり」のある言葉を探そう。

私は此間漫才の都々逸を聞いて胸を打たれた。それはこ

○雨が降るから来ないか  
知らん雨が降るから来るか知ら

と云うのだつた。

都々逸は低俗だ、そんなものを感心するお前に川柳のよさが分るかと笑う前に、此の都々逸の内容、男を待つ女の心持を考えて見てほしい。何と云う味のある心持だろう。何と云うまい表現だろう。即ちこれが言葉の「さわり」と云うべきものだ。

### 街路樹と川柳

#### 八木摩太郎

堺に糸乱記と云う本がある。古い本で、糸割符貿易の再興に当つて、割符人の人選問題に、端を発して遂に、除外された古割符筋目と、新な人々と新旧対立から数年間訴訟となつた元祿時代の大訴訟状で、七巻に亘る珍本であるが、その巻頭に堺の街路樹の事が書いてある。今それを掲げて見ると、

「先の刺更石河氏松樹を北の入口に、二行に植えて永く栄へんことを願ひ、水野氏東の土居川に梅樹の並木を植えて、二葉の童子も、聖賢の匂ひ、他邦に聞えん事を表せられ、稲垣氏漆の樹を同じく植えて民を利せんと願ひ、佐久間氏竹を、大仙陵に植えて、人の心の直ならん事を誓ひ、其外の刺更松桑の類を植えた」と書れてあるが、是を思ふと、都市の美観を図つた、今の緑化運動と、福利施

設であろうが、松の並木を植えた街は、たゞ単に並松町として名が残り、土居川は、自由都市の遺物として街を囲む、昔ながらの川として流れているが、梅樹も、漆の樹の影も無い、仁徳御陵の竹は、雲の彼方で、庶民としての私は知らないが、松桑の類は果してどこにあるのであろうか私はそれも、知らない。

かつて寛政の頃、初代川柳は木枯やあとで芽をふけ

川柳の句を遺して寛政二年九月二十三日他界したが、後の人々にこの川柳が育てられた。

こゝで我々は大いに考えさせられる。たとへ都市の美化運動で植樹しても、その木が枯れたり、太くなりすぎて、メ縄を掛けなければならなくなつたり、蛇が住んだり、都市計画の邪魔になつたり、文化財保護委員と、都市計画委員と、対立して喧嘩したりするよりも、寧ろ、木は枯れても、

歌の大関難波津に浅香山

古川柳

のように、木は枯れても、進駐軍の射的場になつても、永久に句になつて、歌になつて残る事がよく以上重要な事ではなからうか、私はがつて糸割符であつた先祖とその庭が、最近、都市計画の新道路で、桶が切後された淋しさから一層、切実に、そう感ずるのである。

## 川柳雑誌社京都支部一同

|                     |                |              |                    |               |                 |
|---------------------|----------------|--------------|--------------------|---------------|-----------------|
| 岡山県吉備郡阿曾村           |                | 富岡諒一(青柳)     | 岡山                 | 長宗白鬼          | 大阪市城東区放出町西一丁目八四 |
| 同 京都市東山区山科勸修寺下ノ茶屋三四 | 同 平岩司郎         | 同 区山科東栗栖野町   | 同 平井繪丘             | 同 区山科勸修寺本堂山町六 | 同 石川よしる         |
| 同 区清水靈山町五           | 同 今田蘇海         | 同 上京区衣棚寺之内上ル | 同 井ノ下秀人            | 同 区衣棚上靈前下ル    | 同 井ノ下晴芽         |
| 同 左京区下鴨下川原町六九       | 同 岩見キヨ         | 同 岩見とくじ      | 同 東山区山科厨子奥尾上町一四    | 同 小林亀一        | 同 区安井北門東大路西入    |
| 同 楠木光二郎             | 同 東山区山科御陵鴨田町三四 | 同 溝川ちか子      | 同 溝川きよし            | 同 月原宵明        | 同 今治市泉川通        |
| 同 京都市左京区浄土寺真如町四     | 同 村松夢裡         | 同 上京区小山東花池町八 | 同 本儀親生             | 同 左京区鴨北園町六    | 同 長尾案生子         |
| 同 区岡崎四勝寺町           | 同 京都市通信病院内     | 同 大鶴喜由       | 同 右京区太秦安養寺         | 同 面影町一        | 同 高岡            |
| 同 京都府北桑田郡弓削村        | 同 京都府林業指導所内    | 同 田中千潮       | 同 京都市上京区相国寺北門前町上ノ町 | 同 田中烏雀        | 同 鞍馬口通室町西入      |
| 同 八木迷々              | 同 東山区山科川田西浦町二六 | 同 柳本憲一郎      | 同 区山科西野山中臣町七       | 同 渡辺良太郎       | 同 (ARC順)        |
| 同 熊本八代郡築村願行寺        | 同 川柳誌上互選会      | 同 鹿本実信       | 同 月原宵明             | 同 今治市泉川通      | 同 熊本八代郡築村願行寺    |









公務員麻雀ばかり強くなり  
あゝあわれベルからベルの公務員  
否とは云わす要求無視される  
療養所の恋もボマード匂わして  
負けん氣は弱い夫をあてにせず  
当分はあの娘の噂狭い村  
倉吉市 岡本智紗美  
上げ底の名物菓子で義理をたて  
無智なこと金とられてもまだ拜み  
岡山市 矢田笑氣坊  
まだいける手並を姑に見つめられ  
俺にだけ言わせて於て否決され  
同 同  
催促もようせぬくせに米を貸し  
同 同  
共稼ぎ電話で合図して帰る  
下関市 山田伊三男  
ワンマンの父あり一家無事送る  
同 同  
妻の靴磨いて楽し共稼ぎ  
同 同  
安らかな臨終だけを母願  
岡山県 大町 別城  
倅せになつても母の涙ぐせ  
同 同  
全快も待たずにパンの爲に起ち  
同 同  
氣兼ねする嫁へ息子が終列車  
大阪府 森本黒天子  
つゝましい近所へ出前が派手に来る  
同 同  
同権を無視して平手で叩かれる  
同 同  
見合から帰るとすぐに肥をくみ  
愛媛県 高木 文化  
がた／＼のバスで名所とやら着き  
同 同  
うつかりと傘屋の軒で雨宿り  
同 同  
幻燈へ夜なべのコード持つてかれ  
大阪市 佐藤 房子  
腰ひもの今宵は妻となる赤さ  
同 同  
あみ物なんて仕事の部では暮し  
同 同  
何事か考え考えとぶ蛙  
大阪市不二田一三夫  
夫婦かと女中に訊けばあれが湯女  
同 同  
寝苦しい訳は蒲團のやわらかさ  
同 同  
ハンカチでクシヤミ包んで女史の弁  
貝塚市 福島 丁坊  
社党とは名ばかり金で踊る奴  
同 同

働けど喰えぬ世宝石賣れており  
同 同  
園交の怒わすれに釣をする  
岡山県 南部ひでを  
引率の女教の紅ははげたまゝ  
同 同  
アメリカが去んで化粧はパリに  
同 同  
二昔前の毛糸で子を育て  
岡山県 梶尾 節子  
まごつくど殺されそうな魚市場  
同 同  
住宅難交際期間の長すぎる  
同 同  
君故のミスとは言えぬ日がつづき  
大阪市 伊藤 定美  
向きあへば甘えて見たいひととなり  
同 同  
当分は嫁かぬときめて茶を習ひ  
同 同  
稻刈へ御苦労だつた案山子抜き  
大和 高田 嘉一  
かんびようの様は火の見ホース干し  
同 同  
借金がないだけましの秋刀魚焼く  
京都市 松下京一樓  
パチンコ屋だけが儲けてるネオン  
同 同  
十二月流石に笑う人が無く  
大和 高田 岩垣日本村  
菊活けて夫婦げんかも面白し  
同 同  
先斗町どすえ／＼に取巻かれ  
貝塚市 伏見 兒郎  
不感症ではないけどねと未亡人  
同 同  
町らしくもならず税金だけ上り  
岡山県 國富 直人  
本人の意思を聞いてと断る氣  
同 同  
洪水の次には保全経済会  
出雲市 森山 壯  
官能の寂しさダシスなど習い  
同 同  
打ち明けるチャンスも無しに榮轉し  
岡山市 齊藤 一心  
大切に過ぎた証抱擁がわき  
同 同  
我が道を行く意氣女から離婚  
岡山県 穂北ベン郎  
労組は規則を一方的と見る  
同 同  
英会話出来てダンスもうまくなり  
広島県 御戸 凡平  
やけ酒も女給と飲めば唄い出し  
同 同  
父ゆきて夕餉の膳が一つ減り  
下関市 東條 鬼道  
子を教え子に教えらる年となり  
同 同  
金の出る話になつて皆だまり  
岡山県 國正兼比羅

## 川維八代支部

佐野 ト 占

八代市大手町

## 平和文芸会

政田 大介

岡山縣赤磐郡赤坂町  
電話赤坂四三番

## 体温川柳会

貝塚市名越千石莊

## 川維大聖寺支部

一 同

石川県大聖寺局区内  
法ヶ坊一四番地

## 小倉へとち

大阪市西区河被座下通  
貿易商 永瑞行内

## 川維下関支部

藤井米三 藤田 蘇人

高橋かうたる 岡 藤市

国弘半休門 中村九呂平

坂田良坊 向田妻楊子

石川侃流洞 久芳木陽子



人造米だけを農相頼りにし 同  
念佛が済んだら叱る氣で続け 出雲市 久家代仕男  
作柄を問えば出来てるとこはなし 同  
火遊びと知つて受話機を置く 岡山県 多田野保子  
お金さえあればあなともいりません 同  
病だれ多い手紙を今日も書き 岡山県 岡 一文  
看護婦のサービスと言ふ花を活け 同  
タツクルの勇氣が一寸ほしい恋 大阪市 金井 文秋  
ベストセラーよく見直せばアチラでい 同  
い、婿を貰えば娘も連れて出る 岡山県 池田 古心  
無視されしその日コップに味がなく 同  
老眼鏡誰のでも合う齡になり 滋賀県 久保 和友  
都合の悪いことは政府も同じこと 同  
瓢箪を撫でて金婚恙がなし 岡山県 春名 米花  
鵜呑みした妓の願ひ大き過ぎ 同  
キリストが何と説こうがああ 岐阜県 石神 古木  
母を焼く煙よ月へ届けかし 同  
藝者養成所だから玉代高くつき 大阪市 石居 高志

飛 田  
封建の昔を高い塀に見る 同  
割勘をうまくすり抜け独り飲む 石川県 福田 卓風  
着替えても大工やつばり木の匂い 同  
意見だけ云うて社長は早う去に 岡山県 小林 夢介  
毒舌の癖が未だに平社員 同  
風の来る氣配コケシの位置をかせ 出雲市 坂本竹ん馬  
一田が駅の賣子を走らせる 同  
大阪のバスは河内の土もつけ 大阪市 丹波 太路  
審美眼妻弁当のお菜にも 同  
鐘三ツ鳴らした声で口答え 和歌山県細野 照坊  
かり縫を着せられ嬉し年の暮 同  
呑み代をスト又ストで物にする 和歌山県清水 初生

泣真似も上手になつた七五三 同  
木枯へ茶つばの葉までちぎらる 岡山県 永松東岸子  
停電の灯がつきチャンス去りにけり 同  
サンダラス似合ひ女に嫌われる 大阪市 本多 省三  
山を賣つた学資でジャズにこつてる 同  
婦長から聖書のサラを手渡され 出雲市 山本 晴路  
借金が自慢の女將若過ぎる 同  
思い出をまあるく包んだすすきの穂 尾道市 渡辺伊津志  
無力さを小犬にまでも見すかさね 同  
新年を嫌やわ娘の二十四五 鳥取県 亀崎 漫步  
四十年積んだ保険の儂なさよ 同  
明治生れで候文が抜け切れず 赤穂市 川西 去水  
竹の葉の揺るゝも季節寒がらせ 同  
声立てぬ父の怒りはよく應え 貝塚市 高崎 雄声  
オイ車掌その車掌にもなれぬ身の 同

映画「赤い風車」を観て  
生活へ貴族がなんだ画筆執る 山口県 徳光 秋人  
好きな絵に一人淋しく斃れたり 同  
お似合いと云われて姪をあわてさせ 名古屋河田 五風  
ハイヒールすねて落葉をりて居り 同  
本当に好きやと一度言うてはし 大阪市 土居 利一  
弟の赤が世間でじやまになり 同  
内助とは夫を送つた後の店 愛知県 坪井 無松  
神を説く友にも慾望ありはあり 同  
草の露おるおるに秋の径 下関市 重永戊理智  
コスモスもう一つして妻の朝鏡 同  
おねだりをしたキリギリス母が飼ひ 下関市 三谷 柳蛙  
誘惑に負けて帰ればボロ疊 同  
療友の足の細さよ日向ぼこ 下関市 向田妻楊子  
邂逅の苦勞話を競ひ合ふ 同  
勝手な奴だがお金は持つて居り 岡山県 赤田 一雨

謹賀新春

|       |          |               |        |       |        |       |             |       |           |       |                        |              |       |            |       |       |        |               |       |            |       |                       |       |
|-------|----------|---------------|--------|-------|--------|-------|-------------|-------|-----------|-------|------------------------|--------------|-------|------------|-------|-------|--------|---------------|-------|------------|-------|-----------------------|-------|
| 前田 伍健 | 松山市真砂町二一 | 横浜市保土ヶ谷区岩崎町一〇 | 福田 山雨楼 | 長野 文庫 | 今治市明神町 | 秋月 宏方 | 和歌山市今福北部二二八 | 山口 如川 | 熊本県菊池郡大津町 | 山本 葉光 | 阿倍野局区内王子町<br>三ノ雲(電四〇八) | 阿倍野区阪南町西二ノ三三 | 石田 沐天 | 大阪府東淀川区加島町 | 西森 花村 | 杉谷 湖山 | 鳥取市職人町 | 岡山県英田郡美作町大字北山 | 岡田 夜潮 | 兵庫縣多紀郡日置村辻 | 家沢 芳花 | 大阪府東住吉局区内<br>西今川町五ノ三〇 | 福本 翻骨 |
|-------|----------|---------------|--------|-------|--------|-------|-------------|-------|-----------|-------|------------------------|--------------|-------|------------|-------|-------|--------|---------------|-------|------------|-------|-----------------------|-------|

秋トンボ特攻隊の様に落ち 大阪市 正口 辰始  
下心あつて早々酔いつぶれ 下関市 浜野みつる  
梅林の施肥も出来たし寝正月 大和 高田 横田 紅淚  
未亡人ともかく塗つて氣が晴れる 吹田市 橋本 幸男  
昇給があつて煙草を光にし 大阪市 田辺 淳義  
家賃など延して出前ばかり取り 和歌山県 岸本 木魚  
水道がカルキの匂う日の曇り 高知市 岡本 元馬  
胸までを帯で締めてる娘は二十歳 石川県 桑山 こよ  
長男が父母の喧嘩をにらみつけ 和歌山県 楠本 慕太郎  
舌つ足らずの口で二世に毒すかれ 尼崎市 島津 番茶  
父と子のこう似るものか足の音 和歌山県 今井 那智黒  
デンスケに笑つて今朝は氣分よし 島根県 石飛 水煙  
アベツクへ咳して通るやきもちや 和歌山県 岡田のぼる  
菊作り人が褒めねば物足らず 山口県 田中 秋穂  
坐り込む氣配一應見せて置き 新潟県 高野 不二  
キリストの愛を女は與え過ぎ 大阪市 清水 望峰  
来るまでは自信のつかぬ爲替つき 大阪市 中村 一  
ニコヨンもバーで遊んだ夢も有り 貝塚市 中辻 芳男  
産月ののろさ夫にふり向かれ 岡山県 沖 一糸  
解禁ではや店先に鴨つられ 岡山県 亀井 星浦  
犯人と胸像だけが知つて居り 岡山県 松島 不在  
這い這いが出来て柱につながれる 岡山県 茶山 富士夫  
ご返事は後からと言う父を持ち 池田市 太田 木声  
女客へ吞めるのにサイダついで 岡山県 繁松 玉露  
齡四十からなる恋はあぶらざり 宮崎市 野口 卯之助  
見習のお世辞が云える様になり 兵庫縣 吉原 紅月  
引揚の振り出しニコヨン今もお 出雲市 原 一月  
君の名はを論じて雨の女工部屋 出雲市 原 独仙  
新聞で見たと噂の母が来る 大阪市 永田 都詩子  
秋深し溶かす絵具の色淋し 愛知縣 岩川 寛虚  
スポーツに國境なしの名演技 布施市 大西 可笑

|                                             |                    |             |             |                                |                     |                       |             |                      |             |                               |                       |                   |             |             |                               |
|---------------------------------------------|--------------------|-------------|-------------|--------------------------------|---------------------|-----------------------|-------------|----------------------|-------------|-------------------------------|-----------------------|-------------------|-------------|-------------|-------------------------------|
| <p>尾道局区内東御所町<br/>尾道海上保安部所屬巡視船<br/>波辺伊津志</p> | <p>愛媛県周桑郡石根村妙口</p> | <p>高木文化</p> | <p>吉原紅月</p> | <p>兵庫県魚橋局区内<br/>印南郡阿彌陀村阿彌陀</p> | <p>愛媛県越智郡津倉村字仁江</p> | <p>塩浜一雄路<br/>(文雄)</p> | <p>鳥井川鳥</p> | <p>岡本雄吉<br/>(元馬)</p> | <p>弘津柳慶</p> | <p>岡山県吉備郡穂井田村増原<br/>穂北ベシ郎</p> | <p>中道梯次<br/>(丁字楼)</p> | <p>大阪府豊能郡箕面町稲</p> | <p>村田眉丈</p> | <p>丹波太路</p> | <p>大阪府東住吉区田辺<br/>東之町五丁目一八</p> |
|---------------------------------------------|--------------------|-------------|-------------|--------------------------------|---------------------|-----------------------|-------------|----------------------|-------------|-------------------------------|-----------------------|-------------------|-------------|-------------|-------------------------------|



馬・馬・馬・馬・馬に就いて訊く

①馬に乗つたこと。②馬肉を喰べたこと。③ろ馬に乗つたこと。④競馬で  
すつたこと、儲けたこと。⑤木馬に乗つたこと。⑥竹馬に乗つたこと。⑦左  
馬を書いたこと。⑧付馬を運れたこと、又はなつたこと。⑨馬の足になつた  
こと。⑩尻馬に乗つたこと、乗せたこと。以上十問中より三問に就いてお答え  
を頂きました。原稿到着順。(編輯局)

(編輯局)

○ 青柳扇子仙

⑧付馬を連れて新聞社に帰り、ついでにその馬に乗つてしまつた。おかげで明るく日は二日酔という始末。その後、宴会などで深酒の翌日は、必ずといつてよいほど欠勤する信用を社内に広め、梯子酒の習癖が、ともすると馬といふものにつなかりを深めている。

⑨また軍馬に乗つた経験は中支へ歩兵として作戦中、左大腿部に銃創をうけ、野戦病院へ後退するとさ味わつたが、そのときの馬は特務兵が扱う内地産の徴集馬で、タチの悪いヤツ。前脚をときどきツマづくようにして、乗っている者を前方へほり出すようにする。付馬でも軍馬でも馬というヤツ

は人の心をよく見ぬき、弱気な者にはナメてかかる習性が共通して  
いる。

澤田四郎作

⑥子供の頃三、四尺も脚を長くした竹馬が流行していたが、禪寺の駕ちやんが竹馬で足を折つてからには、私の家でもいつも躰が地についている、まるで下駄ばきの様になった。竹馬しか作つてはくれないかつた。村一番の餓鬼大将も、このときばれたが大いにひけめを感じさせられたが、夏の水泳きもあぶないしかたで、夏は行けず、膝までもない川のイデで腎を、蛭に血を吸われ通して、世のあじけなさを感ぜさせられたが、これも今は亡き祖母の深いなきけとしみろ、思わ

須崎 豆秋

①私が一年志願兵の兄習士官だった頃、歩兵でしたけどチョット馬術を教えられたことがあります。その乗馬たるや軽重隊から借りて来た実にあみすばらしい駄馬だったんだから、中学の同窓であつた片桐騎兵中尉に（片桐君は三笠宮さんのお附武官となり馬術を御指導したこともあり、ニユギニア作戦の兵団長として壮烈な戦死を遂げた後年の片桐中將です）見つかつて「まるで漫画の兵隊さんみたいだ」と笑われました。

②土曜の晩、南地で遊びすぎてお金が足らず翌朝、男衆の徳さんをお付馬につれて堺の悪友江君のと

○ 吉田 水車

⑨同窓会の余興で一心太助の愛馬「青」の足になつたとき、見物席から「うしろ足えゝぞーッ」と半疊がはいつたので、ついうれしまぎれに「ヒヒヒーン」と一声明ないたところが一心太助に「コヲコロッ」と叱られました。落語みないだが本当のはなしです。

○ 大森風來子

①③馬に乗つたのは内地、ろ馬に乗つたのは支那、こう答えると兵隊であつたことを思い出す。六年十月の実役をもつていても兵長で帰還したほど軍隊嫌いだつた。しかし今思い出してみても當時がそんなにいやなことばかりでもない。

⑧付馬を連れたことも、なつたこともないが、私の想像句につけ馬に聞かされているのろけなり

がある。昔はのんびりしたもの、鼻歌も聞えそうだが、この頃は一直線にブタ箱行きだろ。

○ 本田惠二朗

②東京の学生時代慢性金欠病が時々集つて、桜肉と銘打たれたいとも色あざやかな馬肉を買つて来て、下宿のボロ畳の上ですき鍋をつつきあつた思い出――其頃のそれはアブレ馬肉よりも格別の味があつたように思えてならない。と云うと今尙食つてゐるやうに聞えるが。

⑤昔々宝塚の遊戯室、銅貨一個  
 放り込むとカタ／＼と動いてくれ  
 るあの木馬、物はためしと乗って  
 見ることにした。銅貨を放り込ん  
 だら正直に其の貨幣価値だけのエ  
 ネルギーでコ、ガセンドと動き出  
 した。顎までがカタ／＼と動いて  
 しまつて、乗るのじやなかつたと  
 後悔したが――それにしても銅貨  
 一個の価値の時間的に長がかつた  
 ことよ。

⑥雪深い山狭の町に生れた僕は少年時代、竹馬に乗つて尺余の雪の中を測歩漫歩した思い出は、ほんとになつかしい。それに乗ることの上手な者、そしてセイの高いやつに乗れる者は何んとなく偉い人のように思えて敬意を表していたものだ。その偉かつた者達がそれ／＼頭が薄くなり出している、中には孫までこさえると云つた気の早いものもある。

## 木村 水堂

①一億一心撃ちて止まむの昭和十五年の簡点呼に備えて、在郷軍人分会の指導の下に名譽の第二国民兵役として、馬力馬に五分間程乗つた(実は馬に乗せてもらったのだが)のが我が生涯にたった一度です。

②昭和十九年の暮比島の状況はいよ／＼皇軍に悪く私の属する頼りない部隊は、ルソン島中部の山岳方面に疎開、米穀のないまゝに水牛を常食して居つた頃に、赤馬を一度喰べた事があるが、その時の美味さは現在のロース以上でした。

③競馬ですつたり、付馬を連れた事のない品行方正さは、養子に懸望された事実が之を証明して居る。

## 池澤 樂居

①むかし／＼大阪に大阪漫談講という秘密のつどいがあつて、略称を大漫講とも申しました。講員は本名を遠慮して別に家号と通名をつけ、会合には幅五寸に八寸の

木札に紐をつけて首に掛け、通名を呼ぶことにしました。「よしや嘉兵衛」(カフエ)などという不良も居りましたが、私もメンバーで、長靴履喜兵衛と云いました。日露戦争の勇士で騎兵だったからです。

②私の今居る京都大宮駅迎谷のトビヤキ教団(私が教父)では、信者の健康指導に仰向に寝て、両足を上に延ばし足先で馬の字を、左足では左馬を書いた足の故障のテストいたします。

③戦争中大阪に言論報国会というのがあり、私にも何か書けと云われ尻馬に乗つたことがあります。

## 岡村 牛耕

①戦時中、おつかなびつくりで乗馬の稽古をやつていた或る日、訓練もへちまもしてない怪し気な百姓馬が、物に驚いて俄かに全速で疾風の如く走り出した。鞍上の私の尻はさながら鞠つく如く、アワヤ落馬寸前、折よく通り合せて馬を止めてくれたのが誰あろう受持の常習遅刻生の登校途上だった。

②小学生の頃、気の弱い子に似ず竹馬の名人で、或る日曲乗り「盲目の垣覗き」をやつていて隣家の塀内へ墜落、運悪くそこが鶏小屋、鶏が驚いたショックで産卵能率が下つたと隣から抗議を申込まれた。

③私は四人兄弟の長男、やんちやの弟は父によく叱られた。つい側から私が父の尻馬に乗つて「八釜しい、お前は黙つてれ！」の一

喝を喰いべそをかけた懐かしい思い出、叱られた弟も、叱つた父も今は亡い。

## 濱田久米雄

①中学校時代に、家に馬がおりました。学校から帰つて夕方前川へ水をのませにあわせて足を洗うために連れて行くのが私の日課でした。だん／＼馴れて来て乗つて行くようになりまして。勿論馬具なしです。ある日街道まで出て行こうとしない馬を、無理矢理に十丁程歩かせ廻れ右をしたとたんに馬は一目散に走り出した。しがみついた私の足の冷汗と、馬の汗とでどうやら落馬せずに帰ることが出来ましたが、いま考えても痛快な思い出です。

## 藤本 茶々

②小学三年の頃今のように男女共学で同級の男生徒に負けまいと背丈の二倍もある竹馬につて、悪童連をしり目に大人達を寒からしめて堂々と通学しました。

③肉類不足の戦時中たつた一握りの馬肉を三拜九拝して闇で買ったものです。

④これも小学生の頃、尻馬につて友達と夏休の宿題を全部やらされて以来乗せられ通しです。でも振り落されもせず大した怪我もなかつたのは、主人という名騎手のおかげでしょう。

## 河村 日満

⑤余り度胸がないので本当の馬には恐ろしくてよう乗らず、阪神

パークにあつた木馬に乗せて貰つて大将にでもなつた気遣い一日を楽しく過した事を思い出します。

⑥二階の屋根にとく程の竹で屋根から出発して屋根に戻つた経験があります。勿論十二、三才の腕白時代の事で、当時正ちゃんやとゾグ小僧を最大の友と思つていた頃です。

⑦兄弟三人と謂つても姉二人の婿のことで入宮前の或る日、とある大阪は四貫島のカフエで顔が会つたのをいゝ事に一緒にのりブルで何んとビールをティーブルの隅から隅まで並べていゝ氣に成つて喜んでいたので、皆が皆ひとの懐をあてにしての散財だったのので嫁のある二人を先に帰して、僕一人に付馬がついて長兄の家に帰つた。姉は嫌な顔をしながら兄弟の僕のために支払は当然だが、兄達の肚の中はどうだったか、兄が支払いをすゝめた事勿論である。

## 前田 五健

①至つて下手、危ない乗り手でした。

②度々あります。どうせ、貼り替へ序でに書かせられ悦に入つた訳です。

③若き時、社員劇で、仲間駒になり芝居の馬に乗り一頃しも中秋三五の夜……てな見得をきり笑われました。足でなく乗つた方です、馬の足から小言を食つたところは内緒です。

## 長谷川三司

④その昔、岐阜のある小さな町

で次ぎ場所が決るまで二三日の逗留、ミィちゃんハィちゃんも小五月蠅く女に飽いた同勢四五人、すき焼でも喰おうと町で一流の料理屋に上つて牛肉のすきを注文したら、牛肉なれば朝の内にお注文がなければありませんとの事、しかたがないので馬でもよいと坐つたのが馬肉を喰べた初めてである。

⑤昔昔の頃、明石の榮楼で友人の市田吾郎がなじみの部屋で酔狂のあまり撰一つばいに「好きな吾郎ちゃん油で揚げて……」あとの文句は忘れたが一気に書いてしまった。驚いたのはその妓、女将も飛んで来たが余りの墨痕鮮さに二の句がつけず笑つてしまった。それからが大変、同じ事なら私にも書けと云う。いつたい筆無精と云うより字の下手な私は吾郎の横にも書けず、まゝよと三味線を取りあげ左馬でも書いてやろうと書いてたまでは良かったが、馬が馬の字に見えず妓が怒るやう／＼三味線を張替の事でけりが付いた。

⑥馬の足になつた事はないが、俗に馬の足と云う連中は若い頃よく遊んだもので、新派では馬は本物を使うか、馬は省界するので馬の足になり様がないが、旧派では馬の足が依前として存在し団十郎以来三代につかえたと云う国宝的な馬の足もある。だがその足もだん／＼なくなつたとある劇評家がないで居た。

## 那谷 光郎

⑦腕白時代、御多分にもれず乗

つたとも、乗つたとも、然し乗つた時、自分の頭を越す高さのものに限られた。それは万一ころんだ時でも頸を突き破る心配がないからと父に強くたしなめられたからである。今でも竹馬に乗つた子供を見ると云い聞かせる事もある。

⑦二十年程前、画会で寄つた時、若い芸者の三味線の裏にかいた、酔余だから字がはねて踊つていた。芸者は勿論泣いて悲んだが老妓は褒めてくれた。悲しみは喜びにかわつたと覚えてゐる。

⑧大学生の時(大正六、七年?)新潟県から始まつて各地に拡大した米騒動のあつた時、米屋や富豪の家を襲つた群衆に交つて飛び廻つた。我ながら行動の鈍さから鎮圧の警官に腕をつかまれ散々に油を絞られた。反抗する度胸もなく深夜下宿に帰つたのを覚えてゐる。翌日、そこそ尻馬でなく頼馬だと友達から笑われた。

### ○ 三鴨 美笑

①子供のころよく裸馬に乗つた。その頃田舎道をオートバイの通ることはめづらしかつたので馬はこれに驚いて一目散に飛び出してとまらず、とうとう泣き泣き大衆で人をよんだことを今でも忘れてゐない。

②このすき焼は泡が立つねと云つたらそれは馬肉だからと云われたが、べつに變つたすき焼だとも思わなかつた。

で、左馬を画いてやつたらそれが大変気に入つてまた頼まれたが、今度は左馬でなく馬の絵を画いてやつた。

### ○ 日置 文郷

①戦時中大山々麓の訓練所で初めて裸の暴れ馬に乗らされ、大山原野を馳けたことは忘れられませぬ。

⑤木馬に乗つたことはありませんが、職業柄、木材運搬用の木馬(キンマ)……機のようなもの……に乗つたことがあります、とんだ木馬です。

⑥山陰の正月は積雪してることが多いので、幼時、雪の中に無数の跡をつけて歩き廻つたことを覚えてゐます。

### ○ 飯降 白香

③その昔、西宮に乗馬クラブがあつたころ、まだ前髪のあげそめぬ昔ですから、ざつと三十五、六年昔の話。可愛い赤の乗馬服に身を固めて颯爽と乗つたのはよいがものの一聞といかぬうちに落馬、それから馬がいかに馬鹿であるかを身にしみて思いしらされた話。

⑤今は昔、千日前の歌舞伎座あたりが楽天地、ルナパークといつたころ、メリーゴーランドに、木馬があつた。それに彼氏(?)と乗るのがすきで、隙さえあれば甘えてつれていつてもらつたことがある。帰りはいつも法善寺の夫婦せんざい……幼き日の甘き想ひ

出です。その彼氏はいまだに誰だつたか判然としないといふ他愛のない話。

⑥たけくらべならで思春期の男女学生が、町内の運動会に竹馬競走をしたとき、手と足と精神との調和がとれず、いやというほど土に顔をたたきつけた思い出今昔の感いとふかし。

### ○ 服部十九平

①私の家に馬がいましたので子供の時から乗馬は好きでした。幼年学校へ這入つてからは、正科で馬術をやリ砲兵科になつたので乗馬本分でした。馬と一緒に断崖から谷へ墜落共に重傷、私は人事不省から蘇生するや血染の地図で報告し、大正天皇に上奏され、名譽を得たこともあります。

②戦地では饑乏を食べました。新馬を去勢して其の睾丸を食べたこともあります。美味しいです。

③熱河で馬で河を渡渉している時水の中へ馬が寝たので困りました。

### ○ 中村ただみ

⑤木馬に乗つたこと——これだけで優に一篇の小説になるんですが、ハガキ一枚程度という制限付きのため極く簡単に筋書だけ申し上げます。

その昔、私が青雲の志を抱いて、郷里信州からはじめ上京した時のこと、上野駅から人力車を飛ばして当時(震災前)十二階そより立つ浅草へ先ず足を踏入

避妊には  
ゼリー剤を!



★落ける時間がい  
らず速効且つ確実  
で連用しても無害  
★注入器で深部へ  
送るから、タンポ  
に送り御使用を

サンジ

1瓶 2太郎 3サンシ

か。

### ○ 延永 忠美

②戦時中関東地方にいたわたしは、馬肉に舌鼓を打つと云う事は二度三度ではなかつた。少しわいがあの桜色の肉は何ものにも代えがたい珍味を私の舌に残している。

### ○ 尼 縁之助

④あり、何れも思い出になるほどのことなし。

⑥田舎育ちのこと故随分乗り廻したのですが、少年の日の郷愁をぞろろです。

⑩考えてみると、人の世の万事が、尻馬に乗つたり、乗せられたり、というこになり、本間に対する答えが判らなくなつた。二十年も昔のこと、旅廻りの画伯、馬専門という風来山人に馬を描いて貰つた。九頭の馬をよろしく配置して、「うまく(馬九)なりゆく」といつた調子、今でもその軸が残つている筈ですが、これなど尻馬に乗せられた方ではないでしょう

### ○ 東野 大八

①「馬と私」というより「馬と兵隊」の因縁の方がつよい。洛陽

攻寄のみぎり馬の「八重ちゃん」と私の別れのくどりは本紙四月号の「哀妻物語」の通りです。その他では私の顔が馬に似ているので、そのかみ口の悪い酒場のカアちゃん「鼻の下にぬい上げをしなさい」とよくいわれた。それはスケベエタらしいというイミでもあるようだが、このいい方は氣にいつたりと喜んだおぼえがあります。

## 戸倉 普天

①昭和初頭伊豆大島の三原山へ登った時土地の若者に手綱を採らせ、島のアンコと馬の背に相乗りした事はあるが、両手で鞍をつかんでヘッピリ腰で馬の背にしがついて居たのだから、颯風堂々、あかりを払う乗馬姿とは申されないであらう。

④瀬洲メルボルンは世界一の競馬の盛んな処で毎年十二月のシーズンには世界各国の競馬ファンが集つて来て、このホテルも超満員になるのである。今を去る二十年の昔、たま／＼此の季節に同地にあつて此の競馬に戯れて儲けた事もあり、スツて終つた事もある。素より素人の何にも知らぬハツタリ競馬であるから、大きな損でもなく、差引通算して若干の赤字で済んだ事を思い出すのである。

⑥正月が近づき、霜深くなる頃から、生国丹波では子供の竹馬乗りが始まる。節の揃つた竹二本を伐り出して、藤藁で爪を結って竹馬を作つて、一本足で馳けッこをし

たり、竹馬の蹴り合いをしたり、時には地上三尺位の高い竹馬に乗つて、雪の中を走つたりなぞ古い慣い出がある。

## 水谷 竹莊

①輜重兵第四大隊に入営して、た頃よく乗りました。しかし特務兵だつたので、公然とは乗れませんでした。信太山の演習地へ夜行軍する時など、居ねわりして歩いても、馬の手綱をもつていれば、馬が引つばつてつれていくくれたものです。

⑦竹莊若かりし頃、博多の花柳界でよく遊んだものです。その頃ある芸妓に惚れられて三味線に書いてやりました。

④水商売をしていた頃よく仲居に付馬にやりました。一人でやることとされるので、二人つけてやることにしたものです。金があるくせに、ないと言つて、つけ馬だとやつて、女をつれだす客と共鳴したつけ馬もありました。

## 坂田 夕鐘

①むかし大阪の北畠に貸馬があつた。トウシローとでも思つたのか急にスピートをかけて走り出し馬舎へ飛込んだ。その時馬は首を下げて這入つたが僕は立つていたので馬舎の屋根に首をひつかけいやと云う程すつ飛んだ。

④去年お盆も近づいたので女戻の三味を張りかえてその夜大いに呑んだ。ひとつ左馬を書いてやる

と筆太に書いたのは良かったが此の馬なんど中の二の棒を立てて引くの横に引いてしまつた。馬場でメイトルが上つていたので、あんな娘を付馬に出したんだけど一寸心配やお前あの娘に付いて行つてんか、姉に頼まれた。まるで付馬の付馬じやがな。

## 大鶴 喜由

①十二、三の頃初めて裸馬に乗つた。幸いなことによ／＼の老馬で稽古にはいゝなと思つた。

⑥七つ八つの頃一間位の親指大の竹にまたがつて鞭を振り／＼走つた。田舎ではこれを竹馬と云つて居つた。

⑧友達三人で誰か持つて居る積りでカフェーに行つた。サービスの良さとウイスキーの口あたりがよいので可成り呑んだ。さて勘定で三人の財布をはいたが三分の一にも足りない、そこで女給二人の付馬となつた。ふた昔前曾根崎新地の芦の家だつたと思う。

## 阪田 真坊

①私が馬に乗つた始めは三十年前の事で、当時広島歩兵第七十一聯隊軍医見習として入隊した時に、若はげの教官が馬に乗れる者は手をあげろ！との事で見習軍医七名中六名が手をあげていたので、一寸おそまきながら全く自信はないが小生も手をあげた事に始まります。大変苦勞をしましたがその後上海事変支那事変、大東亜事変とつき／＼応召してその都度

樂をしました。人間はなんでもやる氣になる事が第一、そしてなんでも身につけて置く事は若い時代にやつて置く事だつく／＼感じて居ります。

⑧馬の足にも学会(中学時代)になつた。付馬になつたことも友人のために二、三回あり。

## 飛・燕・往・來

★藤本満年氏より

台湾、香港の文化経済視察団に

一路 鄭 銘

## 謹賀新春

川村 好郎

大阪府泉北郡高石町北四六五

## 川雜玉造文部

大阪市東区岡町三五八

德 永 雅 美

同東成区西今里町二丁目四六

好 崎 申 仙

同北区北同心町二丁目四八

永 田 六 龍 子

同旭区今市町二丁目一四九

東 喜 久 堂

同天王寺区宰相山町一四七

清水 白 柳 子

平素の御無沙汰

おゆるし下さい

福田 妄 夢

大阪市西成区北吉

田町二〇番地

ひまわり 社

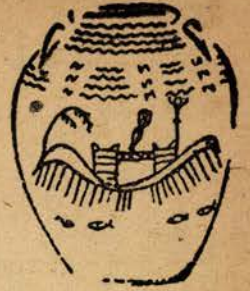
大阪府泉北郡高石町富木

府宮住宅五三号

新 川 博 也

同行し、台湾に来てから一週間になります。東京羽田で冬服を脱ぎ捨て、夏服姿で来たのですが、丁度当地は一年で一番涼しい季節で、夜は少しばかり肌寒い思いをすることもあります。日本の五月から六月頃の氣候です。大体台湾を一巡し、各地で歓迎攻めを受けています。十二月一日にはO.A.T.機で香港に向い、四日頃帰国する予定です。各位へよろしく。

——二九日台北にて



## 柳樽から馬を 曳き出す

### 富士野鞍馬

ひょうたんから駒が出る——  
という。午歳の正月御祝儀

として柳多留から馬を曳き出  
して御覽に入れよう。しか

し、柳多留の中には、たくさ  
んの馬が居るが、竝んで居る

のではないので、これを探し  
て曳き出すのには、少し骨

が折れる。どりあえず百頭ほ  
ど曳出してみた。まず市中の

馬として、  
八文がのむうち馬はたれてい

る (三)  
八文は安酒一合で、馬方が立

のみにしてゐる。  
八文がのむうち五郎乗つてに

げ (拾五)  
これは芝居の矢の根五郎。

煮うり屋の柱は馬に喰はれけ  
り (初)

芭蕉の句に「路ばたの木樫は  
馬に喰はれけり」というのが

ある。  
馬方のぶつうち垣をみなくら

「ぶつ」はバクチを打つてい  
るのである。

馬方が居ぬと子供が芸をさせ  
る (初)

「うーまよ馬や、豆一升やる  
から腹太鼓たゝけ」という童

謡があつた。  
馬をしからせては馬士も一人

前 (二三)  
馬方無学。

南州は牛北州は馬を越し  
南州 (品川) へは牛町、吉原

(北州) へは馬道を越してゆ  
く。

五丁でも二丁でも馬けちな役  
吉原行 (五丁) も芝居行 (二

丁) も馬はつまらぬ。  
馬の尻のみけんをかする小侍

行列の少年武士。  
長生きをする足輕は馬に乗り

寺坂吉右衛門は、生きのびて  
うまくやつて一杯か— (二)

(三)

武士になつた。

御来迎ほどなく通る馬の声  
早朝から通る。 (六)

十三日馬糞踏みくだだぶだ  
ぶ (七八)

十月十三日のお会式の江戸四  
谷通りは、堀の内妙法寺詣り

で雑沓した。  
八ッ房をつけて内藤の駒は出

る (九四)  
堀の内詣りに新宿で女郎

買。  
放れ馬理不尽に蹴かけ上り

(十六)  
どこの家でもかまわない。逃

げこむ。  
放れ馬いざり討死する覚悟

(八九)  
いざりでは逃げるにもにげら

れない。  
放れ馬かり豆屋にておさへた

(八)  
放れ馬も喰いにかゝる。

放れ馬をとらまへて来てしや  
べる也 (二十)

とらまえるまでは死に者狂  
い。

神主の口にとらるゝ納め馬  
馬の飼料の頭をはねる神主。

(武九)  
めくら馬売付けた夜の面白さ

(武十四)  
うまくやつて一杯か—

めくら馬糞がさわれば口をあ

き (武十)

糞はワラ製。飼料とまちがえ  
て。

市中の馬はこれ位にして、  
旅の馬では

あべ川で馬はきなきをあびて  
行 (三)

馬上で名物阿倍川餅を喰いな  
がら行く。

立つ沢を心なき身の武士にき  
き (二〇三)

鳴之沢の絶景、西行の故事を  
きいても馬士は知らない。

大磯へ馬士はせい／＼追つて  
来る (四)

これは「矢の根五郎」の場面  
七里では牛八里では馬で越し

(二〇二)  
七里ヶ浜と箱根越。

馬叱る声を寝て聞く宇都の山  
東海道宇津の谷峠。

(武十七)  
上り馬すてばひらふの氣でつ

ける (六)  
荷物を馬にのせる馬方。

安産の使者は家中での乗り人  
かん馬東西にはせたる御本腹

(七)  
大名奥方の安産。國元へも、

親類へも早馬が駈ける。  
馬で行人は見えけり稲の中

(二枝笠)

## 謹賀新春

南区医師会文化部

杏林川柳会

(順不同)

河村 瑞川

黒木 弾正

牟田 一哲

長谷川 迷路

中島 生々庵

安岡 珊枝郎

海野 比呂志

南 捨舟

田中 鳥耕

中島 兎庵

平尾 太希志

岩崎 一伸

山川 阿茶

昭和二十九年

一月元旦

道中の人を稻田から眺める。

そこで田舎馬を一す。

馬で来るのでよめん女ははねる也 (五)

馬——ハネル——の駄洒落。

村中によめ入へかす無事な馬 (七)

(七)

花嫁を乗せるのには、おどかしい馬でないところ。

馬を買ふほどでうけ出す軽井沢 (八)

(八)

軽井沢の飲盛をうけ出すのに、馬を買う程要つたか？

六日の賀茂に馬糞さびしき (九)

(九)

京都賀茂の競馬は五月五日。

くらべ馬より木の梢を見て笑 (十)

(十)

くらべ馬つづいて落ちる雨蛙

これも賀茂の競馬で、見物の人が木の枝に煙草入をひつかけて忘れてしまう。

牧の馬髪の間から眼が見えて (十一)

(十一)

親馬とくるふも長閑牧の馬 (十二)

(十二)

牧場の馬。

(十二)

これで話を昔に戻して、落馬を詠んだ句を探し出すと、

花ものをいはねど落馬人が知り (十三)

(十三)

花よりも外に知る人もなし落馬 (十四)

(十四)

馬から落ちて腰折れの名の高倉 (十五)

(十五)

馬から落ちて腰折れの名の高倉 (十六)

さ (二二)

御落馬は如何さて／＼いとお歌 (二二)

(二二)

腰折れを詠んで落馬はつつがなし (二三)

(二三)

落冠も落馬も百の中へ入り (二四)

(二四)

(拾六)

馬の尻持つたで宮は落馬をし (四二)

(四二)

御落馬いそがしい場でかぞへ (拾六)

(拾六)

高倉は落馬しそうな御名也 (十)

(十)

松山市 前田 伍健

政治屋の心臓展もあつて欲し

ブレイキを掛けに來たよと長い友

人造米は／＼と大僧正

文動に洩れたお歳を危ぶまれ

稼がねばならぬ姿を冬の蜂

行く年を迎える年の風に佇ち

黒田節堂々として下戸唄い

茶羽織が似合う師匠のいゝ年増

大阪市 橋本 緑雨

深みゆく秋へふところ淋しすぎ

皆と別れた後で訪ねゆくところ

大阪市 麻生 葭乃

釘づけにしても門松たてたがり

屠蘇機嫌らしい追補のある賀狀

詠 近 舟 同

俱利伽羅のやうに兼平落馬する (六二)

今井兼平は、栗津ヶ原で、刀を口へ入れて落馬して、立派な最後をとげた。

畜生正直姿が又落ちる (九二)

馬の行く方へのつてくわにわか武士 (十四)

妹がお妾にあがつたので、にわか武士に取立てられたが、馬術は知らない。これは落馬ではないが、

元馬の出入からさと茶師話し (十三)

馬くずしをうちそこなつた源三位 (十六)

傘はりのむすこと馬のつらへは (十五)

ていのいい馬どろぼうと源三位 (十九)

馬ぐらいやつたがいゝとあやめいひ (九)

仲綱は宿札のある馬にのり (拾五)

頼政の子仲綱の名馬を、宗盛が所望して借りて、返す時に、馬の尻に「仲綱」と焼印して返した。こんなこともあつて宇治川の会戦となつた。又故事として

人くらひ馬に純友口があひ (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

下総につないだ馬のやかまし (十三)

社会式株道鉄気電海南

部 柳 川

会 柳 川 局 通 交

- 北川 春巢
- 富岡 淡舟
- 福島 正則
- 浜畑 胡蝶
- 加藤 ライト
- 兒島 與呂志
- 松下 小柳子
- 小田垣 蝸牛
- 森 文夫
- 松岡 茶々坊

戸 倉 普 天

兵庫縣水上郡沼貫村字小野

さ (十二) 平将門の紋は繫ぎ馬であつた。純友と談合しての謀反。

左馬が勇馬蹄にかゝる源五郎

(一五七)

明智左馬之助の湖水渡。

道鏡が母馬の夢みて孕み

(三七)

道鏡の一物巨大。

故事はこれ位にして、

うりものと書て木馬の面へ張り

(初)

おもさしは馬に似ているきり

(六)

蠟燭で馬も髪結ふ大三十日

(ケイニ)

等と詠まれ、馬でない馬には、

竹馬の小口へ赤いやつをさげ

(九)

竹の馬につるして小裂を賣り

歩く商人があつた。

顔見世に顔を見せない馬の足

(二〇七)

馬になる役者は男二匹也

(六六)

とこれは芝居の馬の脚。

めつちちの蛙桂馬にとんで行く

(九〇)

若様の御意は桂馬の五間飛び

(一一九)

桂馬と利久高上りして落度

(一五三)

かの御家に和尚桂馬とらたれ

(拾二)

将棋の桂馬を詠んだ句もあつた。

馬の耳蛙の面に母こまり

(五九)

馬耳東風の息子。

陣中で巴は馬に二つ乗り

(拾五)

顔見世は仕立おろしの馬にの

り

馬でもやられずと婚礼延すな

(八二)

この馬は、女の月経をいうの

で、当時は越中ふんどしのよ

うな、木綿の月経帯をしてい

たので「馬」という。それで

女の初潮「初花」を初午にか

けて詠まれている。

初うまは娘も赤の飯を懐き

(三八)

初うまの娘稲荷へ詣られず

(七四)

初うまの日から踏まれぬ影が

(四五)

出来

(三六)

初花という新馬に娘乗り

(傍初)

馬には乗つてみる赤のまんま

(武十)

ど何れも初花と初午を洒落

(四一)

初午にてんで二本持つてゐ

(四五)

子供は太鼓のバチを持つてい

午の日は正月ないと下女おも

(四五)

初午は二月の上午である。

序に丙午(ヒノエウマ)の

年の生れの女は夫を喰うとい

われて縁遠いので

問詰めてあとのさびしき丙午

(武十五)

聞干してあとのつまらぬ丙午

(拾三)

薬核になるまでつなぐ丙午

(三四)

大社でも持てあます丙午

(二二四)

丙午ふんどしの娘なり

(三八)

丙午遠いとこから結納が来

(五)

遠縁に義をむすぶのは丙午

(四四)

丙午しつかり荷物つけてくる

(三五)

暮の関越せぬは丙午に乗り

(七六)

花嫁に時々化ける丙午

(四)

三度目はただの午でもおそろ

(武十)

等々と作られている。

又午歳の人として信長があ

(四一)

十兵衛が馬をのんだは本能寺

(四五)

午歳をこぼぐ。

丹波の鼠京へ出て馬を喰ひ

(十九)

光秀は子の年であつた。

最後に曳き出したのは、

「鉢の木」の佐野源左衛門の

馬。

佐野の馬戸塚の坂で二度ころ

び

かの馬に乗つて来たかと最明

寺

佐野の馬さて首をたれ尻をす

かし

佐野の馬かんろのやうな豆を

くひ

源左衛門ひんぷくりんの鞍を

置き

佐野の馬下馬に置く内人だか

り

佐野の馬やつぱり武士の馬で

ある

源左衛門馬にひんくの房をさ

げ

貧乏の佐野源左衛門は、所謂

いざ鎌倉に馳せつけたが、馬

は瘦せ、鐙はボロ／＼であつ

た。しかし鉢の木の返礼に加

賀、能登、越中の三ヶ國を頂

戴した。

これで百余頭の馬を列べ

て、めでたく、一九五四年、

午歳をこぼぐ。

## 謹賀新春

川 雑 日 立 楼 島 支 部

丸尾 潮花  
山口 秋花  
野本 香水  
下山 清潮  
眞鍋 一瓢

川 雑 出 雲 支 部  
い ず も 川 柳 会

原 独 仙  
多久和 朱 扇  
久家 代仕男  
曾田 大 朗  
森山 莊  
野村 岬 月  
尼 縁之助

川 雑 貴 生 川 支 部 会 員

山 田 季 賛  
山 田 ス ミ 子

広島県可部局区内  
龜山村 綾ヶ谷



# 秋春筆雜

(二の其)

## 寸言

小山文三

結核薬ストレプトマイシンの創製者であるアメリカの某博士の来朝講演談によれば、さすがにアメリカの話は大きいのに驚かされるのである。曰く「ストマイは之を常用すると肉体が肥つて来るから、豚や牛に飲ませたり、注射したりするがよい」三匹の豚を飼つて少しづつ肥らせるよりも一匹飼つて同じ目方だけ肥やす方が遙に経済的であり且つ飼育上にも労力が省けて有利であらう」と

之を聞いた我医薬学界の權威者達、互に目と目を見合せて、こんな事はこちらでも判つてゐるのだが、残念ながらこちらでは高貴業として取扱われて我食塩や重曹の様な訳には参らない」所詮豚さんまでには其のおこぼれさえ廻せないのである。以上は誠に羨しい話であるが静に考へて見るとそんなに驚くに当るまい。山羊の乳の余つたものを鶏に与え、と産卵が多くなるから大凡農家は之を実行している。酪農の発達した地方では牛乳風呂も珍しくなからう、養鶏場で鶏死した母鶏を賣手がなければ肥料に埋めて捨てるのが常例であつて決して自ら之を食おうとしないのが人情である。要は品が有り剩つて、運賃にも足らぬ価値しかない物なら家畜に呉れたり、肥料にしたり、捨て、終つたりするのが当然であらう。処と人による経済単位の違いは誠に恐ろしいものである。

昔の句に「白魚に価あるこそうたてけれ」と言うのがある。蓋し思ひは今昔共に一つであると痛感する。

パチンコ漫談  
須崎豆秋

「儲かりまつか」とか「ぼろいことおまへんか」が大阪人の挨拶ことばだつたが、先日電車の中で重役級の服装をした人が出會つて「どうです出ますか」と来た、パチンコのこころらしい。

夜間飛田附近を通ると、白く塗つた一パイ屋の女が「社長さんちよいと」と袖をひつぽる（むかし

は旦那はんとか大将とか言つていたが）振り切つて通りぬけると、「パチンコ帰りに寄つてちようだいネ」。

戦争でもパチンコでも止める潮時というものがありません、あんまり勝つので調子に乗つていゝ氣になつてゐるとお終ひにはスツカラカンですわ、もし東条さんにパチンコの経験があつたらシンガポールあたりで、あつさり止めといたでしように……。

川柳をやり出して間もない人が「小句会で没になつた句がある雑誌の課題吟へ投句したら天に抜けた。同じ句が選者という機械で天に抜けたら没になつたりするでパチンコみたいだ」と申しました。

九二ノ四通北屋津三区川淀東市阪大

### 部支川淀社誌雜柳川

|    |     |    |    |
|----|-----|----|----|
| 鈴木 | 天貪  | 志水 | 礼三 |
| 西森 | 花村  | 岡島 | 柳蛙 |
| 木村 | 水堂  | 名知 | 敬二 |
| 加納 | 山茶花 | 松下 | 清  |
| 水野 | 水茶  | 武部 | 若菜 |
| 藤原 | 栄一  | 武部 | 香林 |

武部 香林  
武部 若菜

大阪市東淀川区三津  
屋北通四丁目二一九

大阪府三島郡味舌町  
鉄道宿舎九ノ二

梶川 蘇堂

長崎川柳社  
池田 可宵

長崎市新大工町五

菊沢小松園

大阪市阿倍野区王子  
町三丁目三四番地



# 一路集

課題吟

## 思出

正本水客選

年寄の思出話に夜がふけて 桔梗  
思出はこだまの声のさびを 成子  
思出が来させた足で帰つてき 重雄  
大臣に母校の悪戯逸話めき 太路  
歌つて過ぎる子等に思出なつかしい 莊  
他人になつてもあの癖思出出し 柳兒  
ずば抜けてやさしい子だった三回忌 南天  
思出の人も見えてる御臨終 黒天子  
思出も話してうまく借りられる 夏六  
面影をしのび弔電打ちに行き 横寿喜  
思出がポツンと切れて退院し 牛歩  
初恋の頃お陽さまの恥かし 実信  
思出をそつとして置く齡さなり 良坊  
思出は空の青さも恋しがり 光男  
思出は捨て二度目の縁に生さ 水堂  
思出なる旅へ子は嬉々と莞ち 房子  
故郷の山に再起を促がされ 芳仙  
若き日の過失を今に温ためる 寛虚  
思出の岸に矢張り船があり 丁坊  
思出に眼閉じ火なる寡婦の恋 日本村  
思出はあゝこも消しこも消し 梨花  
夫婦して話せば思出くちがい

思出出したよに飛び込む野の蛙 星浦  
思出ののれん他人派手に住み 十悟  
思出は戦犯前の頃の軸 摩太郎  
思出がまだ消えぬ未亡人 多久志  
思出をたどつて女と旅に出る ひでを  
思出のバーはマダムも皆変り ゆずる  
思出の奥の一間も人に貸し 千流  
思出はチュウインガムの味がして 風の子  
旧紙幣大事にしまつて母達者 光郎  
思出は人に語らず死を選び 圭水  
思出を残し課長は栄転し 正郎  
静かなる中で思出駆けめぐり 天保銭  
思出を連れれば僕がみじめ過ぎ 伊津志  
浮雲を追つて思出みつめてゐる 一郎  
思出は膝で死なした友の顔 秋穂  
思出が此処まで俺を引張つて 一平  
女名刺さて誰だつた誰だつた 曉舟  
アルバムに忘れられた人のあり 与呂志  
思出が遊廊ばかりの老工員 五月坊  
なれそめをたぐつてあれは俺の負け 満秋  
ハナハトを思出しつゝ子にまかせ 天郎  
思出を綴れば名士は金になり 九里三  
思出の多い男は独りで居 禎三  
思出を語るも夫唱婦随なり 雄声  
恥かしい思出恥足して見度く 春日  
思出をポツリと妻が語る夜 高志

長生きをし過ぎ思出みな忘れ 卓風  
思出のあまりに多い十八九 喜久治  
Sだつた人が二号のクラス会 一雨  
思出を語る女形の細い指 三林坊  
思出し思出ししては涙する 辰始  
叱られた思出へ師はほへえまれ 万古  
思出は皆な中国にある不倖せ 東南  
叱咤怒罵思出寒き駅に立ち 千容  
二十代を思出しては一人笑み 不二郎  
一生の思出写真にして残し 加寿緒  
踏切に思出がある松葉杖 鉄兒  
思出の三角関係一人去り 満佐志  
思出は母の苦勞の美しく 葉光  
思出のどれにも母がいて呉れる 同  
あの頃はよかつたなあと写真帳 直人  
思出は子を欲しがつた頃を云い 同  
思出の部屋へ通した顔なじみ 夢介  
思出の衣裳着てみる土用干 同  
思出のスナップ僕も若かりし 恵二郎  
思出の出湯へ妻は行きたがり 同  
思出を辿つて妻の針遅し 代仕男  
レヂスター二台ふした頃を云い 藤堂  
思出をぶつとつて切る芋の湯気 同  
思出をこしらえに行く時刻表 悦子  
美しい思出ばかり島育ち 同  
めい／＼に思出があり母の通夜 同  
思出に日の出も拝みたい二見 同  
思出の晴着が重い離縁の荷 雄々  
思出はあゝ横綱のインタービュ 同  
思出の歌へ音痴も首を振り 十九平

思出が若い世代に容れられず 十九平  
思出に残るは情いひとばかり 潮花  
アルバムの厚み思出ばかりなり 青柳  
思出の町報恩の途中下車 鮎美  
思出し思出しに致しますとアブレの娘 七面山  
佳・思出はよい母であり父であり 方眠  
佳・思出は四十を越してみな楽し 番茶  
佳・思出は玉垣に来て児を載せる 朴人  
佳・思出は四十を越してみな楽し 青柳  
佳・思出は玉垣に来て児を載せる 潮花  
佳・思出は玉垣に来て児を載せる 鮎美  
佳・思出は玉垣に来て児を載せる 山雨楼  
佳・思出は玉垣に来て児を載せる 京一樓  
佳・思出は玉垣に来て児を載せる 和友  
佳・思出は玉垣に来て児を載せる 水客

## バスガール

富岡淡舟選

郷土美の誇りをもってバスガール 五月坊  
バスガール淡谷のり子の顔に似て 朴人  
バスガール高い踵を案じて居 鉄兒  
バスガールの化粧くづれたワシユアワ 茶々坊  
感情を殺して無事なバスガール 万古  
うちの娘と名前が同じのバスガール 寛虚  
バスガール何処かで水を貰て来 芳仙  
喫煙を横目でにらむバスガール 洛醉  
死に行く客とは知らぬバスガール 文郷  
お嫁入りまでと働くバスガール 方眠  
バスガール今日は電車で逢いに行き 七面山

# 柳界展望

並びに句会風景を録音、翌朝ラジオ山陽で放送好評を博した。大阪通信病院川柳会の忘年会が十二月十日午後五時から玉江橋北詰の江川寮で開催。南海電鉄川柳忘年句

バスガールは切れぬ服を着て御不浄も案内してバスガールバスガール母と妹を顔で乗せバスガール村の小供と顔なじみしまいは自分も押し込めバスガールバスガール恋人が乗りていているバスガール聞いていようがあるまいが摺れ違ふバス嬢同志目で笑い酔いもうまくはいたバスガールバスガールスリの現場を見てしまひバスガールバフも這入った鮑吊りのど自慢なら鐘三つのバスガールバスガールどなつた客へ笑顔見せバスガール服の筋目を気にかけてバスガールの声で四五人分が空き折詰へ今日バスガールつゞきバスガール一寸峠で花も摘み

不漁 木魚 星浦 正郎 芳花 圭水 代仕男 京一樓 十九平 雄々 一平 満秋 与呂志 番茶 荊花 蘇堂 丁坊

バスガール見つめられてることは知らずコムバクト出して空車のバスガール終点で化粧を直すバスガール水害の説明もするバスガールバスガールいつもの客に笑顔見せバスガール目立たぬ程の化粧をしこの土地の生れと見えねバスガール急カーブの字になつたバスガールバスガール目ざとく子供のを読みバスガールきれいな嘘もついて居りバスガール硬貨ばかりの釣を出しギリギリの客と知つてバスガールバスガール次のカーブもやんと知りバスガール自分の声は別にありラツシユアワー尻がはみ出るバスガールバスガール狸寝入りと知つてバスガールバスガール疲れた紙幣釣にくれ

トン坊 朝氣 光男 葉光 雄南 頑三 悦子 葉乙女 梨花 南天 夢介 曉舟 木魚 一朗 孤舟 光郎

出来ているらしいコンビのバスガールバスガールも日本人の太い足バスガールアベツタ連れへフツと立ちバスガール今日は機嫌の悪い声いたづらの子バスガール舌を出しバスガール帰れば無口な娘にちてバスガールせめてルージュを濃く引きバスガール晩には母と差向いバスガール労働の父が床に居るバスガール発車へ一寸髪を撫でアベツタへ妬く日もあつたバスガール坐り込みしたと思へぬバスガール乗れるだけ乗せバスガールしがあつたバスガールの声は異郷のアラセトバスガール甘い言葉を背で聞き

柳叟 和友 千流 垂楊 文郷 春日 三林坊 山雨樓 京一樓 日満 摩天郎 青柳 水煙 文夫 山壯 黒天子 山雨樓

人・バスガールフツと退めたい顔になり風の子地・ワテらから恋もするわきバスガール省三天・制服を脱げば夢あるバスガールゆずる

品質優良  
**タチカワペン**  
TACHIKAWA PEN

大阪市東区豊後町四八  
立川商事株式會社

タチカワペン  
タチカワ  
タチカワ

▼本社新春句会は一月九日(土)午後五時半から下寺町二丁目市バス停前の光明寺で開催される。山陽新聞記者川柳大会(岡山市)は十二月六日午前十時から遺族会館で開催、出席者二百十余名の盛會ぶり、路郎氏披露並びに句会風景を録音、翌朝ラジオ山陽で放送好評を博した。大阪通信病院川柳会の忘年会が十二月十日午後五時から玉江橋北詰の江川寮で開催。南海電鉄川柳忘年句

会は十二月廿一日午後六時から、粉浜の親和寮で開催。南区医師會文化部杏林川柳会の忘年句会は十二月二十二日午後七時半から一伸居で開催。以上何れも路郎主幹出席。川柳弓削支部(岡山県)の師走句会は五日に笑泉居で開催。おかざき(岡崎市)の十一月例会は二十日に開催。川柳岡山支部水島グループ句会(倉敷市)は十一月十八日夜水島公民館で開催された。颯柳会(岡山県)の十一月例会は十二月に千坊居で開催。川柳梅田支部(大阪市)は十二月二十二日に法隆寺吟行を開催された。颯柳会忘年句会(岡山県)は十二月七日

ゆたか居で開催。青蛙川柳会(伊丹市)は師走例会を七日午後五時から健康會館で開催。あしと川柳会(大牟田市)は一月十七日午前十時から大牟田市西米生宮ノ原、行信寺で西日本地区新人川柳大会を開催される。つやま川柳社(津山市)主催の美作新年川柳大会は一月二日午前十時から津山商工会議所で開催される。京都番傘川柳会では廿五周年記念に陽春四月十二日全国川柳大会を開催される由。吉備団子第五集が十二月五日に岡山市内田三三三川柳雑誌社岡山支部から発行された。作家百七十二人の自選句集である。作

家の住所録を附し、気の利いた編輯である。頒価一〇〇円。一六円。川柳岡山支部主催で十一月十五日「山陽川柳出版記念川柳大会」を山陽旅館で開催され句会状況がラジオ山陽で放送された。高木文化氏(愛媛県)は十二月の石根川柳会に長野文庫、月原啓明氏等を招いて句会を開催される由。小倉へと氏(大阪市)は十一月十三日朝、軽い脳溢血で倒れられ永瑞行で静養されたが、大分軽快になられ横臥して作句されている由。藤田一三夫氏(大阪市)は近鉄ユース・湯の山温泉のことを書くため招待されたとのこと、同氏は担当されることになった。

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正  
確▼開催月日及場所記入▼締  
切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社十一月句会(大阪市)

十一月七日 於 光明寺

爽涼たる秋、十一月句会は家庭的に差  
支える向も多少あつたが、作句シーズン  
とて、開会前、続々詰めかける熱心さで  
あつた。開会について、句評は、北川春  
葉氏の温泉並びに風呂について医学上の  
見地から、自句並びに竹莊、風来子、悦  
子三氏の句を引例して短評を加え、有益  
なる談話をせられた。次いで路郎師の柳  
話、大阪と堺を比較し、川柳も各自の  
個性に依つて、句を生かすべきであると  
教えられた後、来阪中の岡山県延永忠美  
氏を紹介せられた。兼席題披露後九時閉  
会。当夜の不朽洞優勝カップ把持者は吾  
郷鈴人氏であつた。(摩)

へとち・いわを・春葉・忠美・霞乃・梨  
里

兼題「ペン」 庶生路郎選

上役の合図はペンの先で足り 賀峰  
ペンを持つ仕事と彼女信じり 雄声  
書留へ局のペン先みなかすれ 淀月  
古ペンをかえる夜長の秋となり 栗  
頼りない保証人やペンを取り 紫香  
はらませてペン先の様にボイさす 兼比羅  
愛情がペンの先からこぼれて出 潮花  
金ペンの書く字があまり下手さる 少将  
ペンを持つ課長私用の時ばかり 賀峰  
ペンの錆などとうとう事言いい 栗  
ねつち売れない社長ペンネーム 淡舟  
ペン先で親を泣かせる嘘を書き 潮花  
海老のやうペン字やたらに跳ねて書き 辰始  
ペン先の動き加減で決まる税 摩天郎  
雄弁に似ずペン字抄どらぬ 雄声  
ひつかるペンでかまらず書いてのけ 凡九郎  
ペンクラブまだ十二時は宵の口 栗  
ペン先で蠅の頭をつゝいて見 水客  
ペン書で一万円と軽く書き 和友  
子を寝せてから借金のペンを取り 春葉  
急患へ受付のペン楷書なり 日満  
恋をしてからのペン字の美しさ 葉光  
ペンで立つ望み他人だからめす 水客  
理想だけ追えば仇敵作るペン 一瓢  
腕力はないがペンには自信あり 春葉  
真情を綴ればペンのもどかし 淡舟  
生理日はペンもじやんに投げ出され 彌平  
ペン字ちと習つてくれと会計課 貴山  
寄せ書に照如とする師のペン字 淀月  
ペン習字課長も一部申し込み 番茶

兼題「公務員」 西尾 栗選

六人の命を細いペンに掛け 忠美  
ペン持てば無職におし書体なり 三司  
ペンを置く時間も書いて恋をまじ 多久志  
社長室ペンは飾りの様に立て 杏花  
ペン持てば男に還る章太郎 玲人  
ペン先をかえてしまふ煙草にし 路郎  
ペン先からははらり出た情死記事 同  
重役へ横入りした公務員 日満  
待命の公務員らし今日も釣 一十  
銭湯で会えただけだ公務員 淀月  
公務員公僕たるをよろこばず 一十  
来た途端公務員だと覚られる 佐野牛歩  
理論だけ一応公務員はきかせる 寛峰  
云うだけは云わして公務員返事せず 十四郎  
旅費もろてパチンコして来た公務員 ひろし  
そつけないさ髭が生えてた公務員 凡九郎  
本人と別に公務員と云う値打 十四郎  
ひき出しに胃散を入れる公務員 京一樓  
公務員だけが知つて苦勞あり 与呂志  
ネクタイの赤が目立つ公務員 潮花  
公務員私服にかえた日の汚職 清流坊  
公務員ふと良心に詫がる職 同  
公務員らしく捲れてる遊びよう 一瓢  
公務員唯なんとなく四時となり 凡九郎  
公務員また週間のパツチつけ 淡舟  
公務員規定作る公務員の苦笑い 栗  
兼題「新聞」 武部香林選  
地方紙も楽しく旅の宿で読み 紫香  
新聞で包めば安い物に見え 潮花  
悪いよう書きませんよと新聞社 摩天郎  
焼芋がほこ／＼ぬくい新聞紙 圭三

席題「節穴」 黒川紫香選

だまされた戦果豊の下から出 番茶  
三面の美談へ眼鏡出して来る 光男  
だまされた広告新聞を恨み 貴山  
市内版うちの二階が写つてゐる 一瓢  
新聞の嘘へ本人達観し 旅風  
お茶を吹きながら朝刊読み足らず 万葉  
夕刊を寝間で見て居る相場欄 ひろし  
新聞を切り抜いて出る人事欄 嘉一  
新聞にだまされるなと又だまし 正斗  
新聞をなつかしく見る旅の朝 梅里  
社運徐々新聞を読む文けの役 水客  
三面へ妻と老眼うばいあい 兼比羅  
ビリ／＼と新聞さいて子の達者 潮花  
新聞の匂と朝のおみおつけ 三司  
留守と云う印の様な新聞紙 紫香  
さりげない顔新聞をのぞき込み 梨花  
新聞の相談欄を信じ切り 賀峰  
三行欄まだ決心のつかぬ足 少将  
真心は例え新聞包みでも 日本村  
新聞を敷いた芝生へ鹿も寄り 梅里  
包んでくれた新聞に友の死を見つ 鮎美  
新聞紙みんな帰つた後の風 水客  
新聞が探して呉れた母に逢い 潮花  
七十の恋は初号の活字にて 香林  
節穴から御本殿を拝んで来 圭三  
節穴の多い月賦の家に住み 賀峰  
節穴も見あいて永病全快し 一朗  
節穴をのぞいて犬に疑われ 香林  
朝寝した眼へ節穴の陽がまぶし 圭三  
秋刀魚焼く煙節穴からも洩れ 葉光  
節穴が子供の指に面白く 潮花  
節穴の白痴美人魚に似てさびし 鮎美

節穴も塞いで新婚の部屋が出来 高志  
節穴は目の高さにはあいていず 春 葉  
節穴を抜けて朝顔よそで咲き 佐野牛歩  
節穴の陽に生活を覗かれる 清流坊  
節穴へヘッドライトがまごに來 水 客  
節穴を覗けば工場風休み 万 葉  
掘越した襖節穴の眼にとまり 番 茶  
節穴へ透く陽のごみは楽しそう 水 客  
ふし穴へ冷き旅の朝にふれ 紫 香

席題「割勘」

西いわを選

割勘で飲まれ家まで送られ 淡 舟  
無理矢理に飲ませ割勘高いこと ひろし  
割勘と別に課長に密附をとり 紫 香  
月給日まで割勘を借りられる 葉 光  
割勘となつて感情もつれて居 清流坊  
割勘の酒に個性を見透かされ 同  
割勘と聞いて仲居は席を変え 玲 人  
割勘のツケが来ている給料日 和 友  
割勘もベイスの割に出さる 佐野牛歩  
割勘のけじめをつけて座敷替え 淀 月  
割勘で出れば十五夜呀えわたり ゆずる  
割勘へ女同志は見栄を捨て 杏 花  
割勘の勘定書に知らぬもの 万 葉  
割勘の一人に古い貸しがあり 旅 風  
割勘と聞いて二次会数が減り ひろし  
割勘のおつりで又も飲むときめ へとち  
割勘の幹事にされて酔いきれず 一 瓢  
割勘で酔いの廻らぬのが一人 玲 人  
日がたつてからの割勘出し渡り 摩天郎  
割勘の猪口も押し頂いて受け 春 葉  
割勘へ女はお茶ですましとき 梨 花  
割勘と決めた屋台のにぎりやし 青木牛歩  
割勘ときまり茶漬も食べて去に 万 葉

麻雀の順割勘に色をつけ 番 茶  
割勘で事務所の祝つゝまれる 圭 三  
割勘のまだ割切れぬ月の道 鮎 美  
割勘でないのを知つてい行き 賀 峰  
割勘へ病氣見舞を買つて出る いわを

席題「町内」

金泉万葉選

町内の宣伝役を買つて出る 凡九郎  
町内に生きて祭の小さい義理 清流坊  
日の丸をせめて町内だけで出を 梅 里  
町内へ温泉宿が一つ出来 圭 三  
町内に捕物がある朝の霜 潮 花  
町内を見廻る役へ星あかり 鮎 美  
町内に此の頃私服らしい人 玲 人  
町内の阿呆が一日笑われる 潮 花  
町内の古老に幼な名で呼ばれ 花 村  
町内のごた／＼知らぬふりを 鮎 美  
町内の事はくわしい無精盤 紫 香  
チンドン屋まだ町内をねつており 花 村  
よいとこを見せ町内の役が増え 香 林  
酔ふて帰れば町内ありに静かす 淡 舟  
町内の人気男として育ち 和 友  
町内の頼母子講にひつか／＼ 春 葉  
町内の野球外野は軍手だけ 彌 平  
賢い人がゐる町内もめること 葉  
町内を子の拍子木が守りぬき 梨 花  
町内の一人はがんと応じない 嘉 一  
町内で三味の音きく年の暮 潮 花  
町内の行事はボスにまかせ 佐野牛歩  
胸病んで居て町内を狭く住み 杏 花  
街灯がとり町内よみがえり 島 浦  
町内を母と歩けばお辞儀され 高 志  
パトロールが来て町内をあて 淡 舟  
町内へボス生きてゆく隙があり 少 将

町内にある博士号忘れられ 雄 声  
町内の告別式を長う待ち 万 葉

川 梅田支部句会（大阪市）

十一月九日

於 阪神ビル三階

水谷鮎美報

破れ三味線別れた人が恋しなり しげお  
破れ三味線昔の夢を流しゆく 都詩子  
恋の果て破れ三味線と旅つづく 三 司  
的外れかてかめ／＼とくやがな 古 方  
的外れでもワンマンは押し通し ゆずる  
的外れで競輪場はたそがれる 六竜子  
妾宅に飼はれぬめ犬になり 白溪子  
小便をする間飼主またせとき 圭 三  
犬叱る声して夫人門をあけ 紫 香  
犬うれし朝の散歩の草の露 鮎 美  
子等の手で庭に仔犬の墓が出来 杏 花  
犬ころの背で秋日が動かない 二 桂  
急病へ敷医者などと言つとれず 杜 的  
急病へつゝ下駄で女医が来る 夢 生  
老農夫笑へば小春日のまるさ 萬 的  
健康が自慢の年で島に出 醉 華

川 備前支部句会（岡山市）

十月十日

於 大森娘句楽居

浜田久米雄報

父ちやんのくしやみ余音をひいて消え 柳 穂  
家付きの娘くしやみもはばからず 一 糸  
くしやみすりや破れ障子があそび 清 風  
一人者誰に遠慮もないくしやみ 正 州  
路地ずまい隣のくしやみで響き 東岸子  
貰い風呂結構な湯へくしやみ出 柳風子  
くしやみしてそらん玉が又狂い みや子  
江戸前の腕が物言う寿司の味 半 仙

おかわりが欲しいお寿司をほめてた 歌流児  
遠足へ寿司でない子は隅でたべ 昭 三  
巻寿司も配給にする子沢山 運平子  
くたびれた背広停年近うなり 淨 美  
苦笑いされて話題をちとそらし 娘句楽  
父ちやんの機嫌が悪い茶の間の灯 久米雄

川 弓削支部十月例会（岡山県）

十月三日

於 金光教会所

福島鉄児報

愛情のテストの指を指に触れ 七面山  
大臣も居る教え子を自慢にし 笑 泉  
教え子の社へ門衛の椅子を占め 不老  
利息まで当て込んで居る催促状 湖 月  
通帳に利息のつかぬ程残り 風 樹  
上役の近所に住んで肩が張り 大 戸  
子宝か知らんが近所迷惑な 一 貫  
御近所は浪曲うちは歌謡曲 飄々  
銀行と隣り合せの寒い風 木 魚  
兄嫁の理窟手も出ず足も出ず 水 甫  
孝心は勝てる理窟に目をつむり 牛 歩  
腕力は妻の理窟に負けてから 久米女  
親にだけ通る理窟を子は覚え みよ子  
潮時を見て小理窟へ釘をさし 笑 泉

東京そばと

灘一とすじ

アベノ橋地下映画食堂街

大 萬

梅里の店

★大万川柳（第卅四回）を募る

兼題「刺身」路郎先生選

締切・一月十五日 句数五句以内

発表・一月廿一日（会内に掲示）

御投句は大万宛・どなたでも

口実が浮ばぬまゝに家に着き 伊佐武  
口実を作る電話を待たしとき 鉄児  
口実も出来二次会へ尻を据え 奇童

### 川日立櫻島支部句会 (大阪市)

十月十日 於 日立造船所

丸尾潮花報

借金があつて美貌をねらわれる 吞水  
恋の借金旦那へする無心 ひさみ  
台風が来て借金のネタが出来 一球  
斗病へ高利の金も消えて行き 清潮  
借金をしても見栄張る妻をもち 春猿  
賀礼とお守り財布ふくらませ 沙駄男  
買物へ財布の中をふと案じ 淡山  
財布からそつと抜出す妻の留守 望峰  
小娘の財布あちらを向いてあけ 一瓢  
うん／＼と財布を開く子煩悩 巨船  
色魔とは知らず不覚を憎む酒 春風  
捨てられた相手色魔にしてしまひ 浮雲  
なまなかの智慧が色魔にさわれる 倭文男  
立呑の肩をたゝいて来る馴染 定美  
菊人形晴着のまゝで繕われ 吞水  
演壇の菊が見事な文化の日 潮花  
菊咲けどエキゾチックな港の灯 鮎美

### 川鳥取支部句会 (鳥取市)

中島鉄洲追悼句会

十一月二十日 於 鉄洲居

太西八歩報

新築に子供の意見も聞いて建て 秀和  
新築も出来骨董もチト揃え 暢月  
新築に御近所はもう相場つけ 三步

新築へ主婦は期待の台所 穂波子  
親の趣味継がず骨董減るばかり 漫歩  
骨董を買い程世帯持ち直し 日満  
本当の値打は骨董屋も知らず 遊星  
病床の雲の流れを見るばかり 法泉子  
病床の窓の日射しに秋を知り 喬水  
値下りに古鉄の山もてあまし 芳道  
出世する手相毎日鉄を打ち 日満  
つめたさも熱さも鉄の持つ心 八歩  
引揚に名ありお燈明もういらす 半茶  
吊問の客が帰れば灯の細し 法泉子  
燈明に今日反省の掌を合せ 耕民  
工芸の美と実用が稼ぐドル 柳窓  
工芸展借家に縁の遠い品 八歩

### 川下関支部句会 (下関市)

十一月十五日

於 下関駅

石川侃流洞報

日曜の父ちゃん僕のアンパイヤ 戌理智  
久し振り両手で叩く友の肩 蘇人  
御意見は聞き飽いてます夜の女 九呂平  
浮き貸しの胸算用が悔となり 藤市  
利廻りにつらさへそくりまて取られ 侃流洞  
借金をたらい廻しで商いし 柳慶  
黙記みな額にしたら炬燵置き かうたる  
手を放す医者は何でもやれ云い 伊三男  
男の子生んだを妻の手柄にし 妻揚子  
斗病の生命線をおつと見る 半休門  
お別れの握手は次の休みまで 司楼  
功績を讀え内助の功もほめ ほなみ  
手から手へ移る坊やの風呂上り 柳蛙  
吾子ながら勘の良いのに又あきれ みつる

### 川浜寺病院支部句会 (大阪府)

贈所新三報

人間に忘れると云う良い言葉 業平  
淋しさは間借りにすぎなく句い 夢郷  
雞スキと惜しまぬ今日の月給日 勢園  
すき焼へ招かざる客一人増え 小雀  
すき焼にしめたかしら箸が出ず 夢児  
すき焼に子は父ちゃん箸を持ち AT公  
すき焼へ妻にも一杯注いでやり 鎮景  
スキヤキとサケで日本の味を知り 句浪人  
すき焼を挟んでやんわり頼み込み 漫歩  
トンコ節になりすき焼はつとまれ 邦利  
すき焼の箸もきょうな親日家 横寿喜  
すき焼にしようと忘年会きまり 風鈴  
すき焼へ遅刻の箸の忙しさ 凡盆  
すき焼を温めて母の冥加良し 溪泉  
かたむける猪口ほどすきへ手が行か 真砂  
すき焼を下戸に委せて猪口をうけ 文糖  
斗病のきびし忘れの子の便り 青道心  
病人の顔を忘れて外出し 秀麗  
名を忘れニツクネームを覚えて 夢路  
忘れてた恋がアルバムには残り 風鈴  
ラッシュアワロー女らしさを忘れ 雅方  
化粧する事を忘れた倦怠期 秀月  
挨拶になつて口上皆忘れ 漫多郎  
へべれけも我家忘れずたどりつき 楽天  
原爆を忘れた様な再軍備 漫歩  
考えて置くを課長はよく忘れ 橋村  
ひよつこりと忘れる頃に葉壳 勢園

## 阪田謄写版

二五町田芝区北市阪大

会商田阪 株式会社

番一九九五 島福 話電  
番四一三 六五

川京都支部句会 (京都市)

七月十六日

於 仲源寺

村松夢裡報

すだれ巻く妻がとらえた虹を見る 磯  
捨てかねたすだれ納家の邪魔になり 鳥雀  
河風を簾で囲む京の味 いくを 誠史  
方角が気になる火事へ電話する 晴芽  
逢うてはならぬ心と別に行く 晏子  
方角が同じで傘へ入れてあげ ゆきら  
今日は方角が悪かつたとスリ 蘇海  
口実へす直な母を拝んでる 豊次  
運の実を喰べたは遠き日の記憶 草之助  
運の夢雨のつづてが驚かし 紫郎  
運に降る陽も幸福そうである 五黄子  
半鐘の高さホースの長さなり 憲一郎  
海水膚波と離れてサングラス 紫蘭  
母の手に家族の箸は一ト握り 誠史  
家族みな寝てから母の涼み台 喜由  
人一人呑んでそしらぬ波頭 磯  
夜学の兄が一人缺ける夕餉の灯 義行  
歯ブラシの位置は父から順々に

川柳支部句会(堺市)

十一月二十八日 於摩天郎居

八木摩天郎報

牛乳屋に今朝は後れた新聞屋 兵太郎  
牛乳とパン北浜も儲からず 万葉  
三七日になるやならずの厚化粧 香林  
おいそれと誘ひにのらぬ厚化粧 没食子  
厚化粧若い男が二階に居 文蝶  
文人と意識している厚化粧 圭水  
厚化粧まだ／＼穠く気の女 佐久良  
辻占に待人来ると笑わせる 雄声  
辻占になじみも出来た社用族 圭水  
辻占を笑つて彼女嫁く気なり 雄声  
飲んでゐる人に辻うら断はられ 摩天郎  
声色を呼ぶお二階は酔うてゐる 山鈴  
猪口へ手を振つて更生第一步 万葉  
社会への一步学生服のまま 貴山  
一万円位と妓承知せず 摩天郎  
一万円を知らない父の七回忌 和友  
一万円の二号二口三口持ち 香林  
残高が一万円の淋しさよ 文蝶  
一生に一度の運にすがりつき 没食子  
一生を悔いぬ惚れ方羨やませ 葉光  
もう卵産まず鶏肉となり 夢遊  
物云はす一万円がおかしうて 生々庵  
声色へもう一息といふブザー 春翠  
現代語でやれに声色チトこまり 英二  
声色のはじめと終りだけが似て 夢遊  
声色が父に似て来た五十過ぎ 摩天郎  
腰弁の一万円に養はれ 南風楼  
慰料は一万円か子が生れ 万葉

大聖寺支部句会(石川県)

十一月廿日 於光郎居

野村味平報

小屋掛けがまはきりんはやつて来る 味平  
小屋一つ建てゝ税金又上り 雪木  
鶏小舎に今日の日曜棒にふり 桃園  
山小屋の一夜雷鳴下で聞き 同  
霞来てあはてゝ炬燵の灰を替へ 醉羊  
置炬燵夜は真ん中屋は隅 卓風  
腰弁でこつたがへしの朝の駅 同  
鯛の値は聞くと目刺を要は買ひ 光郎  
求人欄朝を待つてゝ目を通し 同上

川柳支部 ウイロー社句会(ハワイ)

古川魔花麗報

愚痴のない老母の肩をそつと揉み 安江  
さら／＼に未練はないとこぼして 原  
寝ても愚痴起きても愚痴を云へる 野涉  
二本目は女房の愚痴が肴なり 魔花麗  
里帰り愚痴を聞くのは母の役 彦坊  
良縁をすねる娘に母の愚痴 拜山  
世間体こたわり過ぎた妻の愚痴 虹橋  
老婦人よると愚痴やら噂やら 柳葉  
姑の愚痴は昔がいつも出る 迷朗

南海電鉄川柳会(大阪市)

於親和寮

友淵貴山報

死んだふりそんなの古いと熊は云う 圭水  
半生は涙の和歌の輝子女史 摩天郎  
半生を後家とは惜しい美しさ 圭水  
古ハガキ子守代りの風車 ヨチ坊  
断りのハガキ見も焼いて捨て 卯の助  
附箋ベタ／＼僕を追つて来たハガキ 凡九郎  
お土産の絵葉書月のある名所 貴山  
抜目なき政府はがきに籤をつけ 樂天  
確か来てましたハガキ探して見 凡九郎  
督税のハガキに急に寒くなり 摩天郎  
貨車の音寝の夢をまごつかせ 音吉  
子等が読む貨車の長さ(ゲット)待ち 貴山  
貨車の牛つかれて来たか声もせず 凡九郎  
忙しい街のんびりと貨車が着き 武助  
機関車のあゝあゝと貨車は着き のぼる

川柳友の会(大阪市)

九月二十二日

於帝國化工大阪工場

佐野牛歩報

ピンボケはいやよと女前に立ち 英治  
ピンボケの返事ばかり社長逃げ 二代  
特価品冬中を着て備けた気 島浦  
値は合えど体に合わぬ特価品 一朗  
特価品まだ儲けてるきずの跡 雅楽太  
特価品のりの厚さと知らず買い 牛歩  
真白なマスク肺への防波堤 乱酔  
DDT仇討つように撒いて居り 辰始  
明日の糧支える夜をよくねわり 京一樓  
赤い羽根千人針を思い出し 雅楽太  
赤い羽根二人の仲へ割つて入り 一平  
赤い羽根ラッシュの足に踏れて 牛歩  
バスもゆれ赤い羽根も風にゆれ 葉乙女  
辞書にない大阪弁で汗をかき 寛峰  
大阪弁でもう里帰り話し出し 翠風

小兒科  
内科  
性病科

安岡醫院

安岡三四郎

道頓堀・日本橋南詰  
東へ半丁浜側  
電話南〇三二四六



## 編輯局にて

★明けましてお芽出度う。本年も倍旧の御愛読をお願いする。★表紙は例によつて米田三男之介画伯を頼わした★本年は午年に因んで、表紙も馬、座談会も、競馬の放談で埋めまし、アンケートも馬に関する記事、富士野鞍馬氏の古く研究も馬の句について執筆を願つた。★それは本年の編輯局がウンと馬力をかける象徴でもある★★本号は四ページ増ページ

## 不朽洞

## 会から

▲「人間横丁」の筆者東野大八氏（岐阜市）が一月十三、四日頃、来阪されるとの報に接した。新春の一夜に小さな集りでも持ちたいと思つてゐる。▼弘津柳慶氏（下関市）は夕刊みなと（十一月廿八日）に「川柳について」を執筆された▼河村日満氏（鳥取市）は鳥取支部句会を開放して誰でも出席出来るよう、句会日を新聞に報じてもらうことにされた由発表を祈る▼児山紫郎氏（大阪市）は十二月二日日出度華燭の

したが原稿がフクソウして掲載し切れないので拙稿の「新川柳鑑賞」は休載させていただいた。★私は十二月五日岡山へ旅した。七日に帰阪、帰るとすぐにBKへ録音に出かけたりして全くいきもつけないさであつた。★十一日の夜、待望していた句集「旅人」が出来上り非常なよろこびを感じた。清貧に甘んじている私にとつては文字通りの豪華出版である。私を愛する人達によつての刊行なので一本を先ず亡き父母の霊前に捧げて、その人達の好意を報告した。そして運んで来て呉れた出版社の人たちや、この仕事のために多大な手伝をしてもらつた摩太郎氏と祝盃をあげた。有難う。（略）

典を挙げられた▼正本水客、黒川紫香、水谷鮎美の三氏は梅田支部の中塚夢生氏、聞香花の両氏同伴、十二月六日の山陽新聞社主催の読者川柳大会へ出席された因みに中塚夢生氏は路郎先生選の兼題「業」の天位に入賞、知事盃をうける栄冠を担われた▼川村花菱氏（東京都）は十二月十一日から三日間、NHKから「武玉川札賀」を放送される由▼麻生路郎氏は十二月八日午前八時十五分からBK聴取者文芸川柳「借金」の選評をされた▼大森風来子（岡山市）は川柳山句集「吉備団子」の刊行や山陽

新聞の読者川柳大会の世話で忙殺されていられる▼本田恵二朗氏（岡山県）は十一月十五日に川柳岡山支部主催の山陽川柳出版記念の句会へ出席され十六日は下津井へ越かれた由▼三嶋美笑氏は米子市教育委員の候補に推薦されたので川柳発展に活動出来るように喜んでいられるなお同氏の川柳個展が予想以上に盛会だつたので米子市を終ると十一月十五日から三日間倉吉、月末には鳥取で開催される由▼阪田良坊博士（下関市）は十一月十二日から管内衛生状態視察を兼ねて広島での病院長会議、嘱託医選挙会議、島津レントゲン、薬剤師会館での講演等々に出席され、下関へ一寸下車長崎方面へ行き博多に下車、十七日には九大の医学部木村登博士（国鉄下関病院顧問医本邦随一の心臓学の大家）と面談、定例研究会へ列席され夕刻帰阪された。十八日には字部の山口医大へ眼科医を物色に行き秋色を愛でられて帰阪された▼田村藤波氏（岡山県）は十二月六日の山陽新聞読者川柳大会へ榮柳会の人々十余人を同伴出席されるところの由なお同氏は湯郷に新宅を建設中であるが八帖二間を柳人のために開放されること▼山田季登氏（広島県）は十一月十六日に二男博志君を儲けられた母子共に健在との報に接したお喜び申上

げる▼国弘半休門氏は宇部市万来町宇部港駅長に榮転されたと同時に川柳宇部支部の建設に熱意を燃やしていられる▼麻生路郎氏は十一月廿九日京都大学附属病院に入院中の村松夢裡氏を見舞われた▼木村名無名氏（大阪市内南区内安堂寺町通一ノ三三）の母堂フク刀自が十一月廿三日に八十歳の高齢で永眠された謹んでお悼み申上げる▼政田大介氏（岡山県赤阪町）の尊父が十一月廿四日朝死去された謹悼▼山崎帆加夫氏（大阪市）は手術のため十一月に済生会病院に入院されていたが小康を得られたので近く退院されると▼村松夢裡氏（京都）市は京大附属病院に入院、青柳博士に手術をうけられ加養されていたが十二月二日二回目の手術をうけられ経過良好とのこと、一日も早く退院されんことをお祈りしてゐる▼麻生路郎氏は十二月五日夕岡山駅着、風来子、忠美、十九平、久米雄氏等に迎えられ中出石の鶴見寮に授

## 局輯編社誌雜柳川 春新賀謹

麻生路郎  
麻生葭乃  
麻生梨里  
福田山雨楼  
戸田古方  
市場没食子  
北川春巢  
丸尾潮花  
眞鍋一瓢  
八木摩天郎  
中島生々庵

### 新会員紹介

一月

浜野奇童（岡山県）正 鉄児氏推薦  
橋本峰春（大阪市）正 橋本幸男（吹田市）正  
高崎雄声（堺市）正 愛論氏推薦  
三枝一策（西大寺市）正 貴山氏推薦  
風来子氏推薦

宿、松山山陽新聞編輯局次長、学芸部の津崎氏等と飲を共にされ、翌日、読者大会にのぞみ、柳話、披露をなし、有志の懇親宴後、宿に帰り翌七日に帰阪された。

謹賀新春

川柳雜誌社ハワイ支部

ワイロ社

同人一同

川雜梅田支部

(イロハ順)

岩田一夜 石岡正司 長谷川三司 小倉へさち 横田方眠 永田里十九 中塚夢生 山崎帆加夫 眞鍋悦朗 藤本春夢草 飾間杏花 森石竹花 水谷鮎美

川雜鳥取支部

大西八歩 藏多暢月 森本法泉子 増田耕民 岩田天保錢 山崎半茶 岩原喬水 岩田秀和 德持晚稻子 河村日滿 岡中遊星 岡島芳道 北村三歩 福田たかし

川柳雜誌社岡山支部

(岡山市内田三二五)  
幹事 大森風來子

浜田久米雄 逸見灯竿 鈴木九披 直原七面山 福島鉄兒 服部十九平 大森娛句樂 延永忠美 大倉四案 水田千石 中村ただみ 木村千容 田垣方大 水谷谷水 桐原一善 田村藤波 中谷仙坊 坂井三葉 政田大介 白井三林坊 岡村牛耕 本田恵二朗 井野格一 白井吞風 松村万古 藤井春日 岡本薫翠 津田麦太郎

川雜池田支部

永藤彌平 降屋十四郎 小池しげお 竹内圭三 村上ゆづる 黒川紫香 戸田古方

藤本満年 藤本茶々

東京都目黒区平野二五

米沢 暁明

愛媛縣喜多郡大洲町  
大字常盤町九一番地

Printed in Japan

(戦時禁)

川柳雜誌

第九卷 第一号

定價 四〇円 (送料四円)

半ケ年 二六四円  
一ケ年 五二八円

昭和廿八年十二月廿五日印刷  
昭和廿九年一月一日発行

大森市佳吉町内方代西五丁目二五番地  
編輯兼發行 麻生幸二郎

大森市佳吉町内方代西五丁目二五番地  
發行所 川柳雜誌社

無言口達 大森 七五〇五〇

募 集

課題吟募集

女教師 (廿句) 戸田 古方選  
約東 (廿句) 杉谷 湖山選  
身の上 (廿句) 市場漫食子選  
恋敵 (廿句) 松江 梅里選  
(二月二十日締切)

每号募集

近作柳樽(雜詠廿句) 麻生路郎選  
川柳塔(雜 詠) 麻生路郎選  
文章(評論・研究・感想其他)  
(毎月廿日締切)

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。  
▲『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。  
▲『課題吟』は何人でも投句が出来る。  
▲『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

# THE SENRYU ZASSHI

NO. 320

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

## 初詣

### 遷宮なつた お伊勢さん

初詣臨時列車大增発！ おらくで あたたかで  
ご家族向きの近鉄特急

越年号・迎春号 往復特急券発売中……

大 海 日……臨時特急 越年号 上六発 21.30 22.30 23.30  
" 急行 上六発 21.00 22.00 23.00 24.00 1.00  
(この臨時急行は全部名古屋へ接続)

元旦から……15日まで 臨時特急 迎春号 上六発 8.20 9.40  
1・2・3・10・15日 臨時急行 上六発 7.25  
定期特急 上六発 7.40 8.40 11.40 14.40 16.40 18.40  
" 急行 (60分ごと運転) 6時から20時まで 上六発毎時 0分

★特急券は早い目にお求め下さい★

近鉄観光案内所上 六 @ 1970 近鉄観光案内所千日前 @ 7713  
" アベノ @ 7020 " 淀屋橋 @ 8861



## 近畿日本鉄道